

訂改
新文典
初年級用

375.9
Ha19
資料室

41848

教科書文庫

4
815
41-1936
20600 33929

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

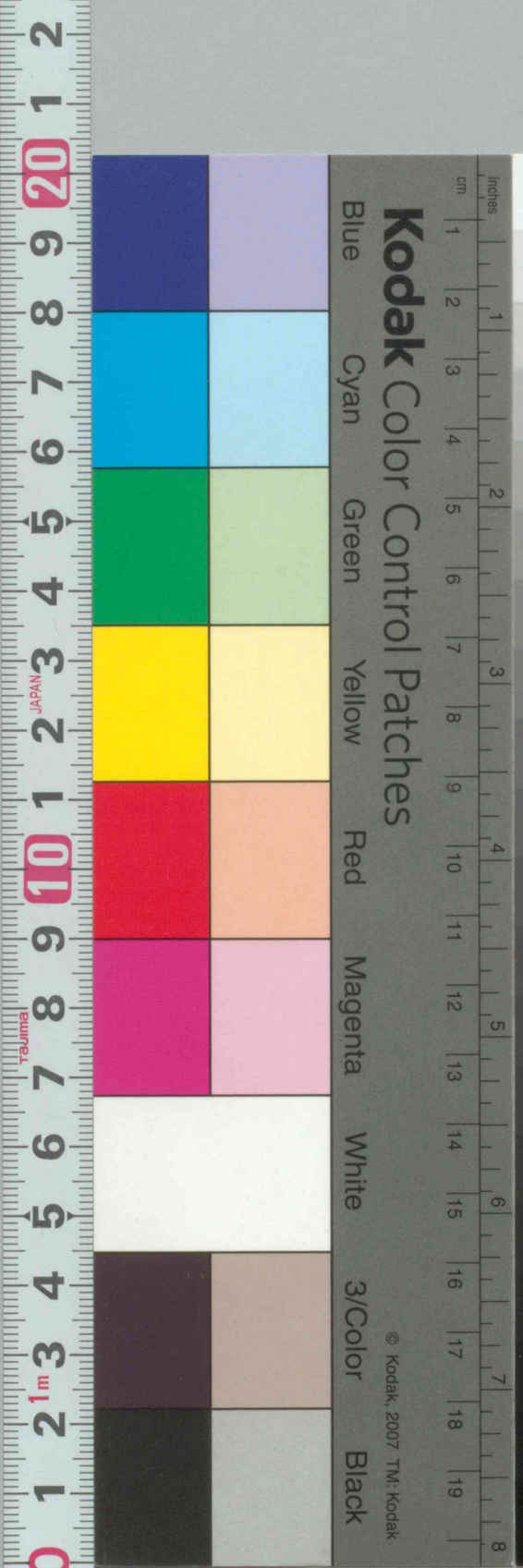
G
Y
M

© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak

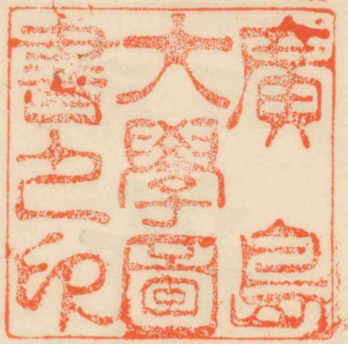


文部省檢定濟
昭和十一年一月十六日
中學國語・漢文科用

東京帝國大學教授
文學博士 橋本進吉著

改訂
新文典
初年級用

東京
合資會社
富山房發兌



改訂新文典例言

- 一 本書は昭和六年に刊行した中學校初年級用「新文典」に改訂を加へたものであります。
- 一 全體の組織は前版と同様であります。但し、今回全部に互つて語句に改訂を施して、説明を一層明瞭ならしめると共に、二三の事項の取扱に多少の變更を行ひ、又一二の新條項を補つて、一層容易に所期の目的を達するやうに圖りました。
- 一 本文に大小の活字を併用して、所載の事項の輕重を明かにしました。
- 一 練習題の中、稍不適當なものを改め、殊に第一篇のは、なるべく簡易なものにしました。

昭和十年十月

例言

- 一 本書は、昭和六年改正の中學校令施行規則及び中學校教授要目に準據し、中學校第一學年用の國文法教科書として編じたものであります。
- 一 本書の著者は、現時の小學教育の實際と社會の情勢とからして、中學校ではじめて課する國文法は、口語を基礎として文語に進むのが、最自然な、最適當な方法であると考へて居ます。これは目下の状態では、實行上多少の不便はあるかも知れませんが、今後の大勢は必ずかやうに進むべきものであると信じて居ります。随つて、本書に於ては、まづ口語について、各品詞と活用とを説いて文法の知識の概要を授け、次に口語と對照しつゝ、文語文法の大要を説く事にしました。
- 一 總説の部に於ては、國語文法、口語文語の差異等について大體の概念を與へた外

に、品詞分類の基礎として必要な事項を説きました。これによつて、從來よりは

一 層明かな各品詞の概念を與へる事が出來ると信じます。

- 一 本書は、また活用に關する知識を徹底させるために、助動詞・助詞の條に於ても、用言との接續について注意をしました。

一 例文は、なるべく平易で、既知のものを選びました。文語の文法は、主として現代の普通文に現はれるものに就いて説き、古文のみのもの又は普通文でも稀にか現はれないものは、大抵之を除きました。これ等は、上學年に進んで、その實例に接した場合に、教授に當られる方々に於て、補つて頂きたいとおもひます。

昭和六年九月

著者識す

訂改
新文典

初年級用

目次

第一篇 總說	一
第一章 國語と文法	一
第二章 文と單語	三
第三章 主語 述語 修飾語	七
第四章 品詞概說(一)	九
第五章 品詞概說(二)	二
第二篇 口語の品詞	一六
第六章 名詞	一六

目次

一

第七章	代名詞	一八
第八章	動詞の活用	二〇
第九章	動詞の活用の種類(一)	二三
第十章	動詞の活用の種類(二)	三〇
第十一章	形容詞の活用と形容動詞	三四
第十二章	用言の音便形	三九
第十三章	副詞	四二
第十四章	接續詞	四五
第十五章	感動詞	四六
第十六章	助動詞の種類及び活用(一)	四六
第十七章	助動詞の種類及び活用(二)	五三
第十八章	助詞	六〇

第三篇 文語の品詞

第十九章	代名詞と接續詞	六八
第二十章	文語動詞の活用の種類(一)	七一
第二十一章	文語動詞の活用の種類(二)	七六
第二十二章	文語動詞の活用の種類(三)	七九
第二十三章	文語形容詞の活用と形容動詞	八四
第二十四章	文語用言の音便形	八九
第二十五章	文語助動詞の種類と活用(一)	九二
第二十六章	文語助動詞の種類と活用(二)	九六
第二十七章	文語助動詞の種類と活用(三)	一〇三
第二十八章	文語の助詞	一〇七

附表

- 第一表 五十音圖
- 第二表 動詞活用表
- 第三表 形容詞活用表
- 形容動詞活用表
- 助動詞活用表
- 第四表 口語助動詞接續表
- 第五表 文語助動詞接續表
- 第六表 口語助詞接續表
- 文語助詞接續表

目次終



日本語
國語
口語
文語

訂改 新文典 初年級用

山道明正

橋本進吉著

第一篇 總說

第一章 國語と文法

- 〔一〕 言語は國によつて違つてゐる。我々日本人の用ひる言語は日本語である。我々は之を國語といふ。
- 〔二〕 日本語には、談話に用ひる言語と、文字で書く時に用ひる特別の言語とがある。談話に用ひる言語を口語と云ひ、文字で書く時に用ひる特別の言語を文語といふ。
- 〔三〕 我々は言語によつて、思ふ事を他人に通じるが、言語は、それぞれきまつた意味をもつてゐる一つ一つの言葉によつて、組

文法

立てられるものである。その組立て方には、一定の法則がある。その法則をはづれては、全く意味を成さないか、又は思ふ事を正しく傳へる事が出来ない。その法則を文法といふ。

〔四〕 口語と文語とは、その文法が違つてゐる。勿論一致する所も多いが、違つた所も少くない。

練習題

A 次の各段から順々に一つづつ語をとり、それをつゞけて、ことばになるかならぬかを見よ。

鯉が	池の	中を	多い	およぐ
鯉を	池を	中の	ゆるく	およげ
鯉の	池に	中で	獣を	たべる

B 次の語を、いろ／＼の順序につゞけて、その意味の違いを見よ。

飛行機が (1) 空を (2) 飛んで (3) 飛んで (4)

文

C 次の文を口語に直し、文語と口語との差異を考へよ。

- 一 春は花咲き、秋は木の葉落つ。
- 二 御殿の御庭には、下葉の色づきたる萩茂れり
- 三 萩の御茶屋といふ名のあるも之がためなるべし。
- 四 花は盛りやゝ過ぎて、既に散りたるもあり。
- 五 綿毛に包まれたるひよこども、小さき聲を立てつゝ、かけめぐる。
- 六 忙しい時に手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

第二章 文と單語

〔五〕 一つの纏まつた思想を云ひ表はす一つゞきの言葉を文といふ。文の終では必ずことばが切れる。文字で書く時は、を附ける。

單語、語

春が來た。一寸いらつしやい。
あなたの御宅はどちらですか。

これ等は、皆文である。

〔六〕 一つ一つの思想を表はす言葉を單語又は語といふ。文は單語から成立つてゐる。

一つの文を組立ててゐる幾つかの單語は、互に意味上關係があり、すべてが合して、一つの纏まつた思想を表はすものである。

〔七〕 宮島橋立松島を日本三景といふ。

學校の庭にきれいな花がたくさん咲きました。

右の文の「及び」を附けたものは、皆單語で、それ／＼意味をもつてゐる。その中、をとのにがましたは、いつも他の語に附屬し、これと共に用ひられるもので、決してそれだけ切り離し

獨立する語
附屬する語

て用ひる事はない。宮島橋立松島日本三景いふ學校庭きれいな花たくさん咲きは、他の語に附屬せず、それだけ獨立して用ひる事が出来るものである。かやうに單語には、獨立する語と、常に他の語に附屬する語とがある。

〔八〕 君も行き、僕も行く。

君は行け。僕は行かない。

右の例のやうに、「行く」といふ語は、ことばの切れる場合やつゞく場合、いろ／＼の他の語につゞく場合などによつて、「行き」「行く」「行け」「行か」など、語の終の部分變化する。

句もよく、味もよい。

天氣さへよければ、行きますせう。

右のよくよいよけれども、「よい」といふ語の變化した形である。かやうに、いろ／＼の場合に應じて語の形の變化する事を活

活用

活用のある語
活用のない語

用といふ。「君」「僕」「味」「天氣」「も」「は」「さへ」「ば」などには、かやうな變化はない。かやうに、單語には、活用のある語と、活用の無い語とがある。

練習題 二

次の文の單語に活用があるか無いかを述べよ。

- 一 馬 は 大そう 元氣 の よい 動物 で あり ます。
- 二 鳥 は ふくろふ を 見る と、 太い くちばし で つゝき ます。
- 三 鳥 の 人 は、「日 は 海 から 出 て 海 へ はいる もの だ」と 申し ます。
- 四 今年 の 春、 二匹 の 山羊 が 生まれ ました が、 もう 乳 を 飲み ませ ぬ。
- 五 大蛇 は 酒桶 を 見つけ、 八つ の 頭 を 八つ の 桶 に 入れ て、 がぶがぶと 飲み ました。

第三章 主語 述語 修飾語

〔九〕

鳥が飛ぶ。 水は冷い。
僕は學生だ。

右の文に於て、「飛ぶ」「冷い」「學生だ」は、鳥が「どうするか」「水が」どんなであるか、「僕が」「何であるか」を述べるもので、之を述語といふ。「鳥」「水」「僕」は、「何が飛ぶか」「何が冷いか」「何が學生であるか」を示すもので、之を主語といふ。すべて、文の中で、「何がどうするか」「何がどんなだ」「何が何だ」といふ關係にある語の中、「何が」に當るものを主語と云ひ、「どうする」「どんなだ」「何だ」を示すものを述語といふ。

〔10〕 白い花が見事に咲いた。

右の文において、「白い」は「花」に附いて、その花がどんな花であるかを定め、「見事」には「咲いた」に附いて、その咲きやうがどんなで

述語
主語

修飾する
修飾語
被修飾語

あるかを定める。かやうに、他の語に附いて、その意味をくはしく定める事を修飾するといふ。「白い」見事に「は花」咲いた」を修飾する語である。之を修飾語といふ。また修飾語によつて修飾せられた語を被修飾語といふ。右の文の「花」咲いた」は被修飾語である。

練習題 三

A 次の文から主語と述語とを見出せ。

- 一 佐藤君も登山する。
- 二 あそこはあぶない。
- 三 それは地理書です。
- 四 弟が泣いて居る。
- 五 われわれは日本人だ。
- 六 鶏が鳴きましたか。

七 運動場は暖かです。

八 どなたかいらつしやいました。

B 次の文の中の修飾語と被修飾語とを挙げよ。

- 一 立派な建物が見える。 立派な 修飾語、建物 被修飾語
- 二 小さい鳥はかはい。 小さい 修飾語、鳥 被修飾語
- 三 自動車は静かに動き出した。
- 四 涼しい風がそよ〜と吹く。
- 五 昨日からの雨はすっかりやみました。
- 六 近所の子供等が嬉しうに遊んでゐる。
- 七 こちらの高い山は常陸の筑波山です。 こちらの 修飾語、高い山 被修飾語

第四章 品詞概説(一)

〔二〕 單語を文法上の性質の違ひによつて、幾つかに分け、その一

品詞

一つ一つを品詞と呼ぶ。本書では次の九品詞に分ける。

名詞	代名詞	動詞	形容詞	副詞
接續詞	感動詞	助動詞	助詞	

〔三〕

(甲) 花	建物	東京	西郷隆盛	名詞
(乙) 私	これ	そこ	あちら	代名詞

名詞

(甲)の諸語は、事物の名や地名人名を表はす語である。之を名詞といふ。(乙)の諸語は、事物の名をいふ代りに、それ等を直接に指していふ語である。之を代名詞といふ。

代名詞

名詞代名詞は、主語となることの出来るものである。之を總稱して體言といふ。體言には活用が無い。

體言
體言は主語となる。
體言には活用がない。

〔三〕

(甲) 螢が飛ぶ。	蛇が居る。
(乙) 鐵は堅い。	これは美しい。

(甲)の「飛ぶ」「居る」は、事物の動作存在を述べる(敘述する)語である。

動詞
形容詞

かやうなものを動詞といふ。(乙)の「堅い」「美しい」は、事物の性質・有様を述べる(敘述する)語である。かやうな語を形容詞といふ。

用言
用言は述語となる。
用言には活用がある。

動詞形容詞は、それだけで述語となることの出来るものである。之を總稱して用言といふ。用言には活用がある。

練習題

四

次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

- 一 燕の飛ぶのは、矢よりも早い。
- 二 あそこに形の面白い島が見える。
- 三 お前の國はどこか。又親の名は何といふ。
- 四 私は今日から日記をつける約束をした。
- 五 それはどなたの帽子ですか。すなはち大きいのですね。
- 六 若い男がわざと手から斧を放すと、斧はどぶんと池へ落ちま

七 兄は、負けてもよいからしまひまで走れと申しました。
した。

第五章 品詞概説(二)

〔一四〕 山の頂上が、はつきり見える。
今朝も、かなり寒い。

右の「はつきり」かなり「は、下」の「見える」「寒い」を修飾する語である。
このやうに、動詞形容詞を修飾する語を副詞といふ。副詞は主語になることは無い。

〔一五〕 あれは海だらうか、それとも川だらうか。
それは僕も讀んだ。併し面白い本ではない。

右の「それとも」「併し」のやうに、前のことばの意味を受けて後のことばに續ける語を接續詞といふ。接續詞は、主語にも述語

副詞
副詞は主語にな
ることが無い。

接續詞

接續詞は主語、
述語、修飾語い
づれにもならな
い。

感動詞
感動詞は言ひき
りになる。主語、
述語、修飾語い
づれにもならな
い。

にも修飾語にもならない。

〔一六〕 あゝ、こまつた事だ。

はい、さうです。

右の「あゝ」「はい」のやうに、感動の情を表はす語や、應答の語を感
動詞といふ。感動詞は、それだけで言ひきりになる事が出來
る語である。主語にも述語にも修飾語にもならない。

〔一七〕 (甲) 出る杭は打たれる。昨日雷が落ちた。
(乙) これは日本の地圖だ。

(甲)の「打たれる」の「れる」は「打つ」といふ動詞に附いて、杭が「打つ」と
いふ動作を受ける事を表はし、「落ちた」の「た」は「落ちる」といふ動
詞に附いて、「落ちる」といふ作用が、今より前に起つた事を示す。
(乙)の「地圖だ」の「だ」は、地圖といふ名詞に附いて、何であるかを述
べ説明して、之を述語とする。かやうに、動詞に付き、之にいろ

助動詞
助動詞には活用がある。

助詞
助詞には活用が無い。
助詞、助動詞は附屬する語である。

いろの意味を加へて、敘述を助け、又は他の語に附いて、之に敘述する意味を加へる語を助動詞といふ。助動詞には活用がある。

〔一八〕

(甲) 庭の菊も、白い花びらに赤みがさして來た。

(乙) 源氏の者どもは、義經をかばひました。

(甲)の「の」も「に」が「て」(乙)の「の」は「を」のやうに、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示し、又は之に或意味を添へる語を助詞といふ。助詞には活用が無い。
助詞と助動詞とは、いつも他の語に附いて現はれるもので、決して單獨には用ひられない。即ち附屬する語である。その他の品詞は、すべて獨立する語である。

練習題 五

A 次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

一 私助詞はなるたけ道助詞のよいところを歩助動詞きました。

二 まああなたほどな助動詞たで助動詞すか。

三 彈丸助動詞はをり／＼足下助動詞に落ちる。けれども將軍助動詞は少しも驚助動詞く

四 やあまた月助動詞が隠助動詞れた。もう戸助動詞をしめ助動詞よう。

五 途中で雨助動詞に降助動詞られました。が、しかし助動詞ちぎやみ助動詞ましたので、あま

り濡助動詞れませんでした。

B 次の文の一つ一つの單語の品詞をいへ。

一 さあ、出助動詞かけよう。後助動詞れると困助動詞るから急助動詞がう。

二 螢助動詞來助動詞い。あつちの水助動詞はにかいぞ。こつちの水助動詞はあまいぞ。

三 兎助動詞はすぐ海助動詞の水助動詞をあびました。すると痛助動詞みが一助動詞そうひどく

四 弟助動詞は病氣助動詞で、昨日も御飯助動詞を食助動詞べない。

五 美しい緑助動詞の葉助動詞は、さら／＼と音助動詞を立ててゐます。

第二篇 口語の品詞

第六章 名詞

名詞

〔一九〕名詞は、事物の名を表はす語をいふ。

- 人名 源頼朝 西郷隆盛 東郷元帥 ワシントン
- 地名 東京市 長野縣 鎌倉
- 地名 富士山 信濃川 琵琶湖
- 物名 犬 孔雀 梅 菊 金剛石 机 家 機械 ペン
- 無形事物心 勇氣 正直 衛生 時間 忍耐 勉強

これ等はすべて名詞である。

○名詞は體言の一種である。即ち活用が無く、主語になる事が出来る。

〔二〇〕名詞のうち、數を表はす語や、數によつて順序を表はす語を、特に數詞といふことがある。

數詞

疑問

- ひとつ 二箇 三人 四羽 五ダース
- いくつ いく人

- 第一 二號 三つめ (午前)四時

練習題 六

次の文から名詞をぬき出せ。

名詞 數詞

- 一 五時に起きて外に出ると、呉服屋の小僧が表を掃いてゐた。
- 二 島を出て六日ばかりたつと、陸のかけはちつとも見えない。
- 三 コロンブスは上陸すると喜んで土地の上に坐つた。涙が頬を傳はつて流れた。
- 四 昨日までに米俵の山が二つ出来てもう三つ目の山が出来かかつてゐます。
- 五 平維盛は十萬騎を引きつれて、越中の國の礪波山に陣を取りました。

第七章 代名詞

代名詞

人代名詞

指示代名詞

〔三〕代名詞は、事物の名をいふ代りに、それ等を直接に指していふ語である。

○代名詞は體言の一種である。即ち、活用が無く、主語になる事が出来る。

〔三〕代名詞のうち、人を指していふ語を人代名詞といひ、人以外の事物場處方角を指していふ語を指示代名詞といふ。人代名詞の主なもの、は、次の通りである。

わたくし	あなた	このかた	そのかた	あのかた	どのかた
わたし	おまへ	こゝ	中包	遠く	どなた
僕	君				だれ

指示代名詞は次の通りである。

事物	これ	それ	あれ	など
	これ	それ	あれ	など
	これ	それ	あれ	など

場	處	こ	こ	あそこ	どこ
方	角	こつち	そつち	あつち	どつち
		こちら	そちら	あちら	どちら

練習題

七

人代名詞

指示代名詞

事物

次の文から代名詞をぬき出し、かつその種類をいへ。

- 一 あつちを見ても、こつちを見ても、どつちへ向いても、山ばかりでした。
- 二 そこにこのかたのステッキがありませんか。
- 三 「だれだい、今笑つたのは、私です。蟻です。」
- 四 君、ちよつと待つて下さい。僕も今そこへ行きます。
- 五 これもいけない、それもいけないとすれば、何がい、だらう。
- 六 ここがあなたの教室です。席はあれにきめます。
- 七 あなたはどなたでいらつしやいますか。

動詞

第八章 動詞の活用

〔三〕 動詞は事物の動作や存在を述べる語である。

動作

行く。 歸る。 飛ぶ。 取る。 立つ。 建てる。 読む。

存在

書く。 勉強する。 思ふ。 知る。 心配する。

存在 有る。 居る。 居る。

これ等は皆動詞である。
○ 動詞は用言の一種である。即ち活用があり、それだけで述語となる事が出来る。

〔四〕 動詞には活用がある。即ち動詞は、用ひ方によつて、その形が變る。今「読む」について見れば、次の通りである。

- (一) 本を讀まない。 *未然形*
- (二) 本を讀みます。 *連用形*
- (三) 本を讀む。 *終止形*

口語動詞の活用

語幹

語尾

口語動詞の活用形

未然形

連用形

終止形

(四) 本を讀む人。 *連体形*

(五) 本を讀めば物しりになれる。 *假定形*

(六) 早く本を讀め。 *命令形*

右の「讀」のやうに、變化せぬ部分を「語幹」といひ、「ま」「み」「む」「め」のやうに、變化する部分を「語尾」といふ。

〔五〕 未然形 前項の例(一)の「讀ま」は、打消の意味の「ない」に連る形である。これはまた「ぬ」「う」(動詞によつては「よう」など)にも連つて、動作がまださうなつてゐない意を表はす。之を「未然形」といふ。

連用形 (二)の「讀み」は、「ます」に連る形である。これはまた「讀み出す」「讀みかける」など、他の用言に連る時にも用ひる形である。之を「連用形」といふ。

終止形 (三)の「讀む」は、言ひ切る時に用ひる形である。之

連體形

假定形

命令形

を終止形といふ。終止形は、用言の本體である。
連體形 (四)の「讀む」は、體言に連る形である。之を連體形といふ。

假定形 (五)の「讀め」は、「ば」に連つて假定を表はす時に用ひる形である。之を假定形といふ。

命令形 (六)の「讀め」は、命令に用ひる形である。之を命令形といふ。

以上の未然形、連用形、終止形、連體形、假定形、命令形のおののを活用形といふ。

練習題

A 傍線を附けた動詞を、語幹、語尾にわけよ。

一 明日から學校が始まります。また一緒に行きませう。

二 僕が「福は内、鬼は外」と叫びながら豆をまくと、妹と弟がそれを

語幹
尾

拾ひました。

三 龜は少しも休まないで走りまわしたので、終に兎に勝ちました。

B 次の各動詞のすべての活用形を考へて見よ。

書く

押す

漕ぐ

打つ

死ぬ

問ふ

飛ぶ

積む

取る

第三章

第九章 動詞の活用の種類 (一)

口語動詞の活用の種類

〔二六〕動詞の活用には五つの違つた種類がある。即ち、
四段活用 上一段活用 下一段活用

カ行變格活用 サ行變格活用

〔二七〕四段活用 「書く」といふ動詞の各活用形は

細字は書かない。 (未然形)

細字を書きます。 (連用形)

細字を書く。 (終止形)

四段活用

細字を書く人。 (連體形)
細字を書けば目がつかれる。 (假定形)
時々細字も書け。 (命令形)

即ち語尾がかきくけけとなつて、五十音圖のアイウエの四つの段にわたる。このやうな活用を四段活用といふ。

○四段活用の動詞は、カガサタナハバマラの各行にある。

行	か	が	さ	た	な
語幹	書	漕	押	打	死
語尾	か	が	さ	た	な
未然	か	が	さ	た	な
連用	き	ぎ	し	ち	に
終止	く	ぐ	す	つ	ぬ
連體	く	ぐ	す	つ	ぬ
假定	け	げ	せ	て	ね
命令	け	げ	せ	て	ね

は	ば	ま	ら
買	呼	踏	降
は	ば	ま	ら
ひ	び	み	り
ふ	ぶ	む	る
ふ	ぶ	む	る
へ	べ	め	れ
へ	べ	め	れ

【二六】上一段活用 「起きる」といふ動詞の各活用形は

弟はまだ起きない。 (未然形)
六時には起きます。 (連用形)
毎朝六時に起きる。 (終止形)
起きる時。 (連體形)

五時に起きればよからう。 (假定形)
遅くとも七時には起きよ(起きろ)。 (命令形)

即ち語尾はきききるきるきれきよ(きろ)となり、五十音圖のイ

上一段活用

の段の音と、それになるれよ(ろ)の附いたものとである。このやうな活用を上一段活用といふ。

○上一段活用の動詞は、カガサ・タ・グナ・ハ・バ・マ・ヤ・ラ・ワの各行にある。

行	か	が	ざ	た	だ	な	は	ば
語幹	起 <small>おこ</small>	過 <small>あや</small>	案 <small>あん</small>	落 <small>お</small>	恥 <small>は</small>	(似)	強 <small>し</small>	綻 <small>ほころ</small>
語尾								
未然	き	ぎ	じ	ち	ち	に	ひ	び
連用	き	ぎ	じ	ち	ち	に	ひ	び
終止	きる	ぎる	じる	ちる	ちる	にる	ひる	びる
連體	きる	ぎる	じる	ちる	ちる	にる	ひる	びる
假定	きれ	ぎれ	じれ	ちれ	ちれ	にれ	ひれ	びれ
命令	きよ	ぎよ	じよ	ちよ	ちよ	によ	ひよ	びよ

ま	や	ら	わ
(見)	悔 <small>く</small>	懲 <small>ちやう</small>	(居)
み	い	り	る
み	い	り	る
みる	いる	りる	る
みる	いる	りる	る
みれ	いれ	りれ	るれ
みよ	いよ	りよ	るよ

○動詞の中には、語幹語尾の區別のつかぬものがある。表の語幹の例に()を附けたのは、それである。以下の表もこれにならふ。

○ヤ行上一段活用の動詞は、「射る」「鑄る」「報いる」「悔いる」「老いる」などである。ワ行上一段の動詞は「居る」「率ゐる」などである。

【二九】 下一段活用 「考へる」といふ動詞の各活用形は

- まだ何も考へない。 (未然形)
- 私もよく考へます。 (連用形)
- つくづくと考へる。 (終止形)
- 何かを考へる時。 (連體形)

下一段活用

考へればわかることだ。(假定形)
落ちついて考へよ(考へろ)。(命令形)

即ち語尾は、へ・へる・へる・へれ・へよ(へろ)となり、五十音圖のエの段の音と、それになる・れ・よ(ろ)の附いたものとである。このやうな活用を下一段活用といふ。

○下一段活用の動詞は、五十音圖の各行とガサダバの各行とにある。

た	ざ	さ	が	か	あ	行
捨	混	寄	投	受	(得)	語幹 / 語尾
て	せ	せ	げ	け	え	未然
て	せ	せ	げ	け	え	連用
てる	せる	せる	げる	ける	える	終止
てる	せる	せる	げる	ける	える	連體
てれ	せれ	せれ	げれ	けれ	えれ	假定
てろよ	せろよ	せろよ	げろよ	けろよ	えろよ	命令

わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ
植	流	越	攻	浮	考	尋	撫
ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で
ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で
ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる
ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる
ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ
ゑろよ	れろよ	えろよ	めろよ	べろよ	へろよ	ねろよ	でろよ

○ア行下一段活用の動詞は得る「心得る」だけである。

○ワ行下一段活用の動詞は「植ゑる」「餓ゑる」「据ゑる」などである。

練習題 九

次の動詞の活用の種類をいへ。

働はたらく、勝かちつ

養やしなふ

上延のびびる

下述くだべる

上^ウ老^ロいる
 負^ウける
 居^ウる
 聞^ウえる
 祈^ウる
 植^ウゑる
 飲^ウむ
 聞^ウく
 上^ウ盡^キきる
 住^ウむ
 居^ウる
 見^ウる
 争^ウふ
 有^ウる
 喜^ウぶ
 見^ウえる
 返^ウす
 似^ウる
 數^ウへる
 見^ウせる

第十章 動詞の活用の種類(二) 變格

【三〇】カ行變格 「來る」といふ動詞の活用形は

まだ誰もこない。(未然形)
 今日の會には井上もきまず。(連用形)
 佐藤もくる。(終止形)
 此處へくる時。(連體形)
 此處へくればよいのに。(假定形)
 此處へこい。(命令形)

カ行變格活用

右の「來る」の活用をカ行變格活用略稱カ變といふ。

未 然	連 用	終 止	連 體	假 定	命 令
こ	き	くる	くる	くれ	こい

○カ變に屬する動詞は「來る」だけである。

【三一】サ行變格 「爲る」といふ動詞の各活用形は

何もしない(せぬ)。(未然形)
 何でもします。(連用形)
 僕もさうする。(終止形)
 何かをする時。(連體形)
 さうすればよい。(假定形)
 早くしろ(せよ)。(命令形)

右の「する」の活用をサ行變格活用略稱サ變といふ。

サ行變格活用

未 然	連 用	終 止	連 體	假 定	命 令
せし	し	する	する	すれ	せし よる

○サ變に屬する動詞は、するだけであるが、漢語や外國語を動詞にするには、この活用にすることが多い。その際サ行になるものもある。

勉強する 運動する キャッチする スケッチする
命ずる 信ずる

○重んずる「輕んずる等は、サ變に用ひるのが普通であるが、又、上一段活用にも用ひる。

練習題 一〇

A 次の動詞の活用の種類をいへ。

サ旅行する 安んずる 案じる
ト感ずる 譯す 重んじる
サパスする 略す

B 傍線を附けた動詞の活用の種類をいへ。

- 一 青空高くそびえ立ち、からだに雪の着物着て、霞の裾を遠く引く。富士は日本一の山。
- 二 屋島の合戦に、義経は小わきにはさんでゐた弓を海へ落しました。弓は潮に引かれて流れて行きます。義経は馬の上にかきよせようとし、うつぶしになつて、鞭の先でそれをかきよせようとし、正成は何時の間に用意して置いたか、松明を出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。
- 三 弱い者をいぢめるのは、男らしくないと思ひます。
- 四 燕は田や畠の作物につく蟲を取つてたべますから、人の役に立つ鳥です。
- 五 次

C 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 絶へず努力している様だが、さつぱり成績があがらない。
- 二 目を閉じて、この詩を讀んで御覽なさい。

- 三 考えて見ると、今強いて行くには及ばない。
- 四 たくさんの苗を植えたが、育つたのは数える程しかありません。
- 五 いよいよ大恩に報ひる時が来た。

第十一章 形容詞の活用と形容動詞

形容詞

〔三〕形容詞は事物の性質、有様を述べる語である。

高い。堅い。早い。新しい。涼しい。

面白い。小さい。長い。軽い。

これ等は形容詞である。

○形容詞は用言の一種である。即ち活用があり、それだけで述語となる事が出来る。

形容詞の活用

〔三〕形容詞は次のやうに活用する。

連甲(一) 道がだん／＼高くなる。 門が新しく見える。

終止(二) あの山はよほど高い。 これは新しい。

連体(三) 高い山に登る。 新しい帽子を買ふ。

假定(四) あまり高ければ登れまい。 新しければ買はう。

右の「たか」「高」「あたりし」「新」のやうに變化せぬ部分を語幹とい

ひ、「く」「い」「けれ」のやうに變化する部分を語尾といふ。

〔三〕連用形 前項の例(一)の「高く」「新しく」は「高くなる」「新しく見

える」など、他の用言に連る時に用ひる形である。之を連用形

といふ。

終止形 (二)の「高い」「新しい」は、言ひ切る時に用ひる形であ

る。之を終止形といふ。

連體形 (三)の「高い」「新しい」は、體言に連る時に用ひる形で

ある。之を連體形といふ。

語幹
語尾
形容詞の活用形

連用形

終止形

連體形

假定形

假定形 (四)の「高けれ」「新しけれ」は、「ば」に連つて、假定を表はす時に用ひる形である。之を假定形といふ。
連用形終止形連體形假定形のおのくを活用形といふ。

高 <small>たか</small> 新 <small>あたら</small> し	語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	語尾		く	い	い	けれ	

○形容詞の活用形には、未然形と命令形とがない。

○形容詞の活用は一種である。しかし場合によつては、「新しい」のやうに、語幹の末に「し」のあるのをシク活用といひ、「高い」のやうに「し」のないのをク活用と稱して、二種とする事もある。

〔三〕形容詞と同じ性質の語で、次の様に活用するものがある。
之を形容動詞といひ、特別な形容詞と見る。

シク活用
ク活用

形容動詞

種二第	種一第	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
静 <small>しず</small> か 寧 <small>ねい</small>	暑 <small>あつ</small> 嬉 <small>うれ</small> し			から(ウ)	かつ(タ)				
				だ					
				な					
								なら(バ)	

未然形は助動詞「う」に連る形である。

暑嬉(し)からう。 静か(丁寧)だらう。

連用形は助動詞「た」に連る形である。

暑嬉(し)かつた。 静か(丁寧)だつた。

假定形は助詞「ば」に連つて假定の意を表はす形である。但し、この「ば」は無いこともある。

庭が静かなら(ば)行つて見よう。

言葉が丁寧なら(ば)怒りもしまい。

第二種の形容動詞は、丁寧と言ふ場合には次のやうに活用する。

丁寧か	語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	語尾	でせ(ウ)	でし(タ)	です			

練習題 一一

次の文から形容詞・形容動詞をぬき出し、その種類をいへ。

- 一 波が穏かならば船で行つてもいい。
- 二 そんなに風が強くては、ずるぶん心細かつたでせう。
- 三 今朝は大そう寒い。屋根の上は霜でまつ白だ。
- 四 話があまりくどいので、いやでした。
- 五 こんなに閑静な所で暮したら、さびしく思ふ事もあるだらう。
- 六 社長は有名だつた人だけに、生活も大變はででした。

動詞の音便形

- 七 自分さへ正しければ、一時悪く思はれても、やがて潔白な事がわかるだらう。
- 八 そんなに面白ければ、見物人も多いでせう。
- 九 それは弓が惜しかつたのではない。この弱い弓を取られては源氏の名折れになるからだ。

第十二章 用言の音便形

〔三〕動詞から「て」「た」に連る場合には、連用形から連るのであるが、サ行以外の四段活用は、普通の活用形とは違つた形から連る。これを動詞の音便形といふ。動詞の音便形には、語尾がイとなるもの、ウとなるもの、ンとなるもの、促音となるものの四種がある。

○音便が起ると、右の「て」「た」は、「で」「だ」と變ることがある。また「たら」「たり」の場

合もたと同様である。

一、語尾がイになるもの(イ音便) カ行四段ガ行四段ガ
行の時は「て」「た」は「で」「だ」となる。

聞いて(た) カ行

騒いで(だ) ガ行

二、語尾がウになるもの(ウ音便) ハ行四段

沿うて(た) 祝うて(た)

三、語尾がンになるもの(撥音便) ナ行四段バ行四段マ

行四段「て」「た」が「で」「だ」となる。

死んで(だ) ナ行

飛んで(だ) バ行

踏んで(だ) マ行

四、語尾が促音になるもの(促音便) タ行四段ハ行四段

イ音便

ウ音便

撥音便

促音便

ラ行四段

打つて(た) タ行

買つて(た) ハ行

張つて(た) ラ行

○ハ行四段は促音にもなり、又ウにもなるのである。

〔毛〕形容詞の連用形が、「ござり(い)ます」「存じます」に連る時は、その語尾の「く」が「う」となる。之を形容詞のウ音便形といふ。

お早うございます。 嬉しう存じます。

練習題 一一二

A 次の文から音便形をぬき出し、かつ何行の活用であるかをいへ。

一 勇んで進め、進んだら退くな。

二 大國主命が出雲の海岸を歩いていらつしやると、波の上は何

か小さい物が浮んでこつちへ近寄つて來ました。

形容詞のウ音便形

- 三 おたまじやくしが、長い尾をふつて、元氣よく泳いでゐます。
- 四 伯父さんに時計を買つていただいて、ようございましたね。
- 五 矢はあたつて居ませんのに、狐は死んで居ます。

B 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 朝日がばつとガラス戸に輝ひた。
- 二 七度轉むで八度起きる元氣が必要です。
- 三 道に迷ふて反對の方向に進むで居た。
- 四 有りがとふございます。この御恩は死むでも忘れません。
- 五 お恥しゆうございますが、これが私の描ひた繪です。
- 六 流れに沿ふて下ると、右に高い山がそびへている。
- 七 いくら上手に歌ふても、耳を傾けて聞ひてくれる者がなかつた。

第十三章

第十三章 副詞

副詞

〔三六〕 副詞は、動詞や形容詞を修飾する語である。

文章をこまかに見る。外は大層寒い。

肉はごく柔かだ。柔かです。

右の「こまかに」「大層」「ごく」等は副詞である。

○副詞には活用がなく、又主語になる事がない。

〔三五〕 副詞は、また他の副詞を修飾することがある。

もつとゆつくり歩け。

よほどはつきり見える。

すこし穩かになつた。

大變親切に世話する。

〔四〇〕 副詞と修飾される語との間に、他の語が入ることがある。

小石がころ／＼と谷底にころがる。

やはりこちらがよい。

多分弟も参りませう。

○副詞には語の終りに「に」「と」のついたものが多い。

静かに	確かに	こまかに	柔かに	たひらに
まれに	すなほに	自然に	立派に	急に
ひらりと	するりと	ころ／＼と	ばた／＼と	

○右のやうな「に」で終る副詞の「に」を除いたものを語幹として、第二種の形容動詞が出来る事が多い。「静かだ」「確かだ」「こまかだ」など

練習題 一三

次の文から副詞をぬき出し、かつその修飾する語被修飾語を示せ。

- 一 味方は、さん／＼に敵を切りまくつた。副詞 被修飾語
- 二 はるかに退いた敵は、また押寄せて来た。
- 三 印度の國は、たいそう暑うございます。
- 四 あれは、ふだんはごく大人しいが、怒ると非常にこはい人です。
- 五 かなり詳しく見たが、やはり見落しがあつた。

接續詞

〔四〕接續詞は、前のことばの意味を受けて、後のことばに續ける語である。

第十四章 接續詞

- 六 あんなに丈夫な人が、そんなに弱つたんですか。
- 七 もつとゆつくりと御読みなさい。
- 八 しと／＼と降る雨の中を、とぼ／＼と歩いて來る人があります。
- 九 右の方にかすかに見えるのは、私の村の灯です。
- 一〇 こんなにひどい雨は、めつたに無いものです。

それは僕も讀んだ。しかしあまり面白くなかつた。道はかなり遠い。けれども時間は多くかからない。藤原は英語も出來、そのうへドイツ語もうまい。

私は野球も下手だし、また庭球も上手でない。
東京及び大阪は我が國の二大都市である。

○接續詞には活用がなく、主語にも述語にも修飾語にもならない。

練習題 一四

次の文から接續詞をぬき出せ。

- 一 それでも宜しい。だが少し面白くない所があるやうだ。
- 二 雨は降るまいが、でも用意に傘を持って行くがいい。
- 三 夜中にふと目がさめた。すると枕もとに蟲の音がする。
- 四 徳育知育並びに體育は、常に並行しなければならぬ。
- 五 午後の會には私も出席します。尤も少し後れるかも知れませんが。

第十五章 感動詞

感動詞

〔四〕 感動詞は、感動の情を表はす語や、應答に用ひる語である。

あ、さうだつた。

おう、熱い。

おい、待て。

もし、佐藤さん。

はい、わかりました。

え、参ります。

あなたは御存じですか。

い、え。

右の「あ」「おう」「おい」「もし」「はい」「え」「い」「え」等は皆感動詞である。

○感動詞には活用が無い。主語にも述語にも修飾語にもならない。それだけで言ひ切りになる事が出来るが、文の首はじめに来る事が多い。

練習題 一五

次の文から感動詞をぬき出せ。 — 感動詞

- 一 あら、お珍しい。佐藤さんですか。
- 二 え、残念だ。また失敗か。
- 三 おや、また風が吹いて来た。

助動詞

- 四 「さあ、出かけようぢやありませんか。」「はい。」
- 五 いや、これでたくさんです。
- 六 こら、何をするか。そんな事をしてはいかん。
- 七 まあ、かはい、お子さんですこと。
助動詞「い」は動詞「表す」の活用
- 八 やあ、皆さん、御苦勞ですな。

第十六章 助動詞の種類及び活用(二)

〔四〕 助動詞は、動詞に附いて、その敘述を助け、又は體言その他の語に附いて、敘述する意味を加へるものである。

○助動詞は附屬する語であつて、活用がある。

〔四〕 助動詞は又他の助動詞に附いて、幾つも重なることがある。
鉛筆が折れました。
鉛筆は折れませんでした。

助動詞には活用がある。

助動詞の種類

受身の助動詞

〔五〕 助動詞には活用がある。その活用のしかたは、動詞と同じもの、形容詞と同じもの(共に或活用形を缺くものがある)、及び特殊なものがある。又、全く語形の變らぬものもある。

〔六〕 助動詞は、その表はす意味から、これを次の九種に分ける。
受身 可能 使役 打消 過去及び完了
推量 希望 敬讓 指定

〔七〕 受身の助動詞 れる られる
人に笑はれる。 主人に譽められる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

下二段活用
下二段活用

「れる」は動詞四段活用の未然形に、「られる」はその他の活用の

可能の助動詞

未然形に附く。「られる」がサ變の動詞に附くと、「せられる」となるが、「いいやうにされる」「噂うわさされる」「侮辱おとしめされる」のやうに、「される」となることもある。注意(サ変) 打たれる(打行四段未然形)

〔四〕可能の助動詞 れる られる 通(サ行五段) 行(行四段) 行(行四段) 行(行四段)

僕も一緒に行かれる。何時でも見られる。

可能の「れる」「られる」の活用のしかた及び動詞への付き方は、受身の「れる」「られる」と同じである。但し可能のには命令形がない。

使役の助動詞

〔五〕使役の助動詞 せる させる

面白い話を聞かせる。入學試験を受けさせる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

下一段活用
下一段活用

打消の助動詞

「せる」は動詞四段活用の未然形に、「させる」は上一段下一段力變の未然形に附く。サ變には、その未然形「せ」に「させる」が附いて、「せさせる」となるべきであるが、普通「念入りにさせる」「練習させる」のやうに、「させる」といふ。

〔五〕打消の助動詞 ない ぬ(ん)

月はまだ昇らない。この事は誰も知らぬ(ん)。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ない		なく	ない	ない	なければ	
ぬ		ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	

ク活用
特殊活用

「ない」「ぬ」は、各活用の動詞の未然形に附く。但し、サ變の動詞には、「しない」「せぬ」のやうに、「ない」は「し」「ぬ」は「せ」に限つて附く。

過去及び完了の助動詞

〔五〕過去及び完了の助動詞

昨夜は十時に寝た。 授業は今済んだ。

ただ

又「ない」「ぬ」は、四段活用の「有る」には附かない。
○「なく」と「ある」と合して一語になつて次のやうに用ひられる。

知らなからう。 知らなかつた。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	たら(ウ)		た	た	たら(バ)	

特殊活用

「た」はすべての動詞の連用形に附く。但し、その時に、サ行以外の四段の動詞が音便形となること、及び音便形に附く「た」は「だ」となる場合があることは、すでに述べた。

○「た」の假定形「たら」は、そのまゝで假定の意味に用ひられる。

練習題

一六

傍線を附けた助動詞の種類をいへ。

- 一 蒔かぬ種は生えぬ。
- 二 私も五時が打つたら歸られるだらう。
- 三 一度にとつとときの聲をあげさせた。
- 四 たとひ金銀で作つた弓でも、御命には代へられませぬ。
- 五 そんな事を言はれては、誰だつてだまつて居られないさ。
- 六 洋服は着なれなかつたので、はじめは困つた。
- 七 薬を飲ませ、粥を食べさせると、やがて元氣になつた。
- 八 もらひ泣きをせぬ者は、ありませんでした。
- 九 通有も左の肩を射られたが、少しも屈せずに進んだ。
- 一〇 自ら蒔いた種ならば、自ら刈らねばならぬ。

推量の助動詞

〔五〕推量の助動詞

第十七章 助動詞の種類及び活用(二)

らしい う よう まい

あれは學校らしい。 會場は此處らしい。
 それがよからう。 弟が知つて居ゐようと思ふ。
 その話は誰も知るまい。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
らしい		らしく	らしい	らしい		
う			う	(う)		
よう			よう	(よう)		
まい			まい	(まい)		

シク活用
 變化せず
 變化せず
 變化せず

「らしい」は「であるやうだ」の意味で體言に付き、之に敘述の意味を加へる。これは又「佐藤も休むらしい」「問題はやさしいらしい」のやうに、用言にも附く。

○「らしく」が「ございます」「存じます」に連る時は、形容詞と同じく、「らしく」となる。

○「らしく」と「ある」と合して一語となつたものは「誰か居るらしかつた」のやうに用ひる。

「う」は動詞四段活用の未然形に、「よう」はその他の活用の未然形に附く、但しサ變には「し」に附いて、「せ」には附かない。

「まい」は、推量と打消との意をかねた助動詞である。動詞の四段活用には、その終止形に、上一段下一段、力變には、その未然形に、サ變には、その未然形の「し」に附く、

〔五〕 希望の助動詞 たい たがる

私はもううちへ歸りたい。 弟もうちへ歸りたがる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい		たく	たい	たい	たけれ	
たがる	たがら	たがり	たがる	たがる	たがれ	

ク活用
 四段活用

敬讓の助動詞

「たい」はすべての動詞の連用形につく。
 ○「たくが」ごさいます「存じます」に連る時は「たう」となる。
 ○「たくと」ある」と合して一語となつたものは、次のやうに用ひられる。
 おまへも聞きたからう。 私も見たかつた。
 「たがる」はすべての動詞の連用形につき、他が希望する意味に用ひられる。

〔五〕敬讓の助動詞 れる られる ます

先生も時々そんなことを話される。
 あのかたは毎朝六時に起きられる。
 新聞はこゝにあります。

語	未	然	連	用	終	止	連	體	假	定	命
ます	ませ	まし	ます	ます	ます	ます	ます	ます	ます	れ	命
											令

特殊活用

「れる」「られる」は活用のしかたも、動詞への付き方も、受身の「れる」「られる」と同じである。但し敬讓の助動詞としては、命令形を用ひない。

「ます」は動詞の連用形に附く、但しその命令形「ませ」「まし」は、敬讓の意を含まぬ動詞には附かぬ。

○「ます」の終止形連體形に「まする」を用ひる事がある。

右の外、動詞の「下さる」「なさる」「遊ばす」「申す」「致す」「や」「になる」を、敬讓の助動詞のやうに用ひる。

あのかたもお出で下さる。(なさる。遊ばす。になる。)
 お呼び申す。(致す。)

〔五〕指定の助動詞 だ です

西郷隆盛は英雄だ。 これは私の本です。

指定の助動詞

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
だ	だら(ウ)	だつ(タ)	だ	(な)	なら(バ)	
です	でせ(ウ)	でし(タ)	です			

特殊活用
特殊活用

「だ」「です」は、體言や助詞の「に」に附く。但しその未然形に助動詞「う」の附いたもの及び「なら」は、「行くだらう」「白いでせう」「行くなら」「白いなら」のやうに、動詞形容詞の連體形にも附く。

○「だ」の假定形ならば、そのままでも假定の意味に用ひられる。

練習題 一七

- A 傍線をつけた助動詞の種類をいへ。
- 一 叔父さんは、これでもよいと言はれた。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 二 鮭は多く川で死んでしまふらしい。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 三 虎はどうすることも出来ませんでした。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 四 あの人ならば、とても承知してくれまい。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消

- B 次の文から助動詞をぬき出し、その種類をいへ。
- 一 あんなに海が荒れたのに、よく平氣で居られたね。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 二 舟は私どもの家です。ちつともこはい事はありません。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 三 蟬の代りに蜻蛉を捕らうか。「いや、蜻蛉は益蟲だから、捕らない方がよからう。」
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 四 川で誰か遊んで居るらしい。僕も行きたいな。よし、お母さんに伺つて見よう。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 五 五時に起されてラデオ體操に行つたら、僕は三番目だった。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 六 この頃少し泳がれるやうになつて、嬉しくてたまひません。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 七 午後叔父さんが魚釣に行かれるので、僕もついて行つた。弟
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消

- B 次の文から助動詞をぬき出し、その種類をいへ。
- 一 あんなに海が荒れたのに、よく平氣で居られたね。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 二 舟は私どもの家です。ちつともこはい事はありません。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 三 蟬の代りに蜻蛉を捕らうか。「いや、蜻蛉は益蟲だから、捕らない方がよからう。」
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 四 川で誰か遊んで居るらしい。僕も行きたいな。よし、お母さんに伺つて見よう。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 五 五時に起されてラデオ體操に行つたら、僕は三番目だった。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 六 この頃少し泳がれるやうになつて、嬉しくてたまひません。
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消
 - 七 午後叔父さんが魚釣に行かれるので、僕もついて行つた。弟
(○)指(定)4打消 (○)指(定)4打消

助詞

- も行きたがつたが、寒いのでやめさせた。
- 次の文に誤があつたら正せ。
- 一 何もしずに遊んで居やうと考へた。
 - 二 これから大いに勉強せう。
 - 三 齋藤はよもや失敗はせまいと思ふが、どう成ろうかね。
 - 四 人がき來ようが、き來まいが、平氣で居る。
 - 五 何事をなすにも、意志が強くあらねばならぬ。
 - 六 僕が若し君なれば、そんな事はしないね。
 - 七 あのと時に病氣せないと優等生になつたらうが、惜しい事をした。

第十八章 助詞

〔五〕助詞は、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示し、或は之に一定の意味を添へる語である。

助詞の種類

第一種

○助詞は附屬する語であつて、活用が無い。

〔五〕助詞の主なものは大體次の通りである。

第一種の助詞 主に體言に附くもの。

- | | | |
|----|----------|-----------|
| が | 鳥が鳴く。 | 私は水が飲みたい。 |
| の | 梅の花。 | 私の讀んだ雑誌。 |
| を | 手紙を書く。 | 行列が門前を通る。 |
| に | 室内に居る。 | 政治家になる。 |
| へ | 東へ向ふ。 | 此處へ來い。 |
| と | 軍人となる。 | 弟と遊ぶ。 |
| から | 門から出る。 | 昨日から始めた。 |
| より | 山より高い。 | 君より早く來た。 |
| で | 汽車で通學する。 | 庭で遊ぶ。 |

〔五〕第二種の助詞 主に用言及び助動詞に附いて、接續詞の

第二種

様なはたらきするもの。

ば 読めばわかる。 やすければ買はう。

と 読むとわかる。 やすいと買ふつもりだ。

ても 見てもわかるまい。 をかしくても笑はない。

けれど(も) 止めるけれど(も)やめない。

が 風は吹くが寒くない。 つらいが我慢する。

のに よせと言ふのにやめない。

からので 雨が降るから(ので)遠足はやめた。

道が遠いから(ので)骨が折れる。

し 雨も降るし風も吹く。 色もいゝし形もいゝ。

て 見て来る。 細くて長い。

ながら 歩きながら見る。 知りながら教へない。

小さいながらよく働く。

たり 寝たり起きたりぶらぶらしてゐる。

勝つたり負けたりする。

〔ば〕は用言の假定形に、〔て〕もは動詞形容詞の連用形及び動詞の音便形に附く。「ながら」は動詞の連用形形容詞の終止形に、〔たり〕は動詞形容詞の連用形及び動詞の音便形に、〔ので〕は用言の連體形に附く。他は用言の終止形に附く。

〔て〕も〔たり〕が音便形に附くと、〔て〕も〔だり〕となることがある。

第三種

〔五〕 第三種の助詞 第一種第二種以外の助詞で、いろいろの意味を添へるもの。

は 私は知りません。 鯨は魚でははない。

も 弟も起きた。 桃も櫻も咲いた。

さへ 手にさへ取らない。 行きさへすればいゝのだ。

でも お茶でも飲まうか。 負けてもすると恥しい。
 しか 三つしかない。 さうとしか考へられない。
 まで 此處まで来い。 私にまで手紙を下さつた。
 ばかり 二時間ばかり休んだ。 行先ばかり考へる。
 だけ 私だけが知つてゐる。 見ただけで歸つた。
 なり 君なり僕なり誰か残つて居よう。
 行くなりやめるなり早くきめ給へ。
 か お前も見たいか。 どなたか見えた。
 ぞ そら、いくぞ。 なかくつらいぞ。
 ね 相變らずやつて居るね。
 よ 雨がまた降るらしいよ。
 な 受けた恩は忘れるな。 人に言ふな。
 の 燕の飛ぶのは早い。 新しいのがよい。

活用の有無による品詞の分類

〔答〕 品詞は、以上述べたやうに九種ある。之を活用の有無によつて分類すれば、次の通りである。

- 一、活用のない品詞
 - 名詞 代名詞 (體言) 獨立する語
 - 副詞 接續詞 感動詞 附屬する語
 - 助詞 附屬する語
- 二、活用のある品詞
 - 動詞 形容詞 (用言) 獨立する語
 - 助動詞 附屬する語

練習題 一八

- A 傍線をつけた助詞の種類をいへ。
- 一 フィリップが薬を調合しに別室へ退いた後へ、王の日頃信頼してゐるバルメニオ將軍から、王にあてた密書が届いた。

- 二 名物の馬市が始まつてゐるといふので、朝から見物に行きました。
- 三 馬のそばを通るのは危険なやうですが、なれると平氣になります。
- B 次の文から助詞をぬき出し、その種類をいへ。
- 一 太郎さんは、雨が降つて、つまらないなあ。といひながら、傘をさして出かけました。
- 二 少し行くと、時計屋の内からラヂオが聞えて來ました。
- 三 雨は今夜のうちにやんで、明日は天氣がよくなりませう。
- 四 昔から雪は豊年の兆てきといふから、今年もよくみゆるだらう。
- 五 万年筆なり鉛筆なり、そこにあるので書くがいい。
- C 次の文を單語に分ち、一々の單語の品詞と、活用ある語ならば、その活用のしかたとを述べよ。
- 一 けなげな娘の言葉は遂に父を動かした。二人は早速ボート

を出す支度を始めた。

- 二 日本帝國は、世界に類の無い立派な美しい國であります。
- 三 私はこの國に生れたことを、一日も感謝しないことはありません。
せん。
- 四 あなたも人代ニずるぶん別名大きくなりましたね。私もあなたのお父さんなどと一緒に、よく道普請みちふしんに出たものでした。
- 五 「叔父さん、勳章がふえましたね。それは金鵒勳章でせう。」
あ、今度の戦争でいたゞいた。
- 六 かう成るまでには、叱られたり笑はれたり、つらい事も少くはなかつた。
- 七 晝でも夜でも、暇さへあれば考へて見たけれども、しかしたゞ考へるだけでは、いけなかつた。

第三篇 文語の品詞

第十九章 代名詞と接續詞

口語文法と文語文法との異同

文語の代名詞

〔六〕口語の文法と文語の文法とは、一致する所と一致しない所とがあるが、それは品詞によつて違ひがある。名詞代名詞副詞接續詞感動詞は、口語と文語とで用ひる單語には違ひがあつても、その文法上の性質は大體同様である。動詞形容詞助動詞及び助詞は、文法上にもかなりの相違がある。

〔六〕文語の代名詞

文語で普通用ひる代名詞は、次の通りである。

一、人代名詞

われ	わ
	汝
これ	こ
それ	そ
かあ	か
あれ	れ
た	た
れ	れ

二、指示代名詞

事物	こ、これ	女格
場所	ここ	
方角	こなた	
事物	そ、それ	中格
場所	そこ	
方角	そなた	
事物	あ、あか、あれ	遠格
場所	あそこ	
方角	あなた	
事物	い、いづ、これ	不定格
場所	いづこ	
方角	いづち	

〔七〕文語の接續詞

文語で普通に用ひる接續詞は、次の通りである。

- 又 且 並に 及び
- さらば されば かくて 因つて
- 或は 又は 若しくは
- 但し 尤も されど 然れども 然るに

練習題 一九

次の文中、傍線を附けた單語の品詞をいへ。

文語の接續詞
語 句 文

- 一 彼は山又山を越えて遠くかなたに去れり。人代名詞
- 二 將軍の名は國內に傳はり、その肖像畫はいづこの店頭にも飾られたり。不接形
- 三 村長に對する村民の敬愛はすこぶる厚し。されば勤續する。動詞
- 四 ことすでに二十餘年なり。語る言葉もち解けてわれはた、へつかの防備。かれはたたへつわが武勇。動詞
- 五 かしこに見ゆるは、停車場及びその官舎なり。
- 六 そはいと名殘惜しき事なり。されば謝恩の爲に、何か畫がきて參らすべし。
- 七 我若し死したりと聞かば、汝必ずこれを持ち去りて、日本の役所に差出すべし。動詞
- 八 こは思ひも寄らぬ仰かな。わが望こそかなひたれども、君の御恩は未だ報い奉らず。たゞいづかたへも御供仕るべし。動詞

文語動詞の活用

- 一〇 九 勤務は午前八時より午後四時まで。但し土曜日は正午まで。動詞
- われもとより賤しき身なれども、この事を承りて餘りの忝さに、そゞろに涙を催し候。動詞

第二十章 文語動詞の活用の種類(一)

〔查〕文語の動詞には、口語と同じく六つの活用形がある。しかし、その名稱と用法とは、口語動詞といくらか違ふ所がある。

未然形 「ず」に連る形である。又「む(ん)」「ば」などにも連る。

打たず 讀まむ(ん) 降らば

連用形 「たり」に連る形である。また他の用言にも連り、

「て」「き」「けり」などにも連る。動詞

讀みたり 降り始む 打ちて

終止形 言ひ切る場合に用ひる形である。

打つ。読む。降る。
連體形 體言に連る形である。

打つ人 読む時 降る雪

已然形 「どども」に連る形で、又「ば」にも連つて、動作が既に
さうなつた意味に用ひる。

打てども響かず。今日は雪降ればいと寒し。

注意一 文語の已然形は口語の假定形にあたる。口語では「降れば」

「打てば」等を假定の意に用ひることが多いので、「降れ」「打て」
等を假定形と名づけたのである。

注意二 文語で假定の意味は、未然形に「ば」の附いたもので表はす。

雪降らば寒からん。 打たば響かん。

命令形 命令の意を表はす爲に用ひる形である。
打て。 読め。 降れ。

〔空〕 文語の動詞の活用のしかたは、口語とは違つた所がある。

次にこれをくらべて示さう。

〔空〕 四段活用 口語の四段活用動詞の大部分は、文語に於て
も口語と同様に活用する。この種類の活用を四段活用といふ。

口語	文語	語	語
読む	読む	語幹	語尾
読む	讀む	讀	讀
ま	ま	未然	未然
み	み	連用	連用
む	む	終止	終止
む	む	連體	連體
め	め	(口)假定	(文)已然
め	め		命令

〔空〕 ナ行變格活用 口語四段活用動詞の中、「死ぬ」は文語で
は次のやうに活用する。

口語	文語	語	語
死ぬ	死ぬ	語幹	語尾
死ぬ	死し	死	死
な	な	未然	未然
に	に	連用	連用
ぬ	ぬ	終止	終止
ぬ	ぬ	連體	連體
ぬ	ぬ	(口)假定	(文)已然
ね	ね		命令

ナ行變格活用

右の様に、文語の「死ぬ」は、なにぬぬるぬれぬと變化する。この様な活用をナ行變格活用略稱ナ變といふ。

ナ變に屬する動詞は、「死ぬ」「往ぬ」の二語である。

○死ぬは現代文では、ナ行四段活用にも用ひる。「往ぬ」は今はあまり用ひない。

〔六〕ラ行變格活用 口語の四段活用動詞の中、「有る」は、文語では次のやうに活用する。

口語	有る	有 ^あ	語幹 / 語尾		未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
			ら	り						
文語	有り	有 ^あ	ら	り	る	る	る	る	れ	れ

ラ行變格活用

右の様に、文語では終止形が「あり」となる。終止形がイ段の音で終るのは、動詞ではこの外に例がない。この様な活用をラ行變格活用略稱ラ變といふ。

ラ變に屬する動詞は、「有り」「居り」「侍り」である。

○居りは現代文では、ラ行四段活用にも用ひる。「侍り」は今はあまり用ひない。

〔七〕下一段活用 「蹴る」は口語では普通ラ行四段に活用するが、文語では、その活用は口語力行下一段の動詞と殆ど同一である。之を文語の下一段活用といふ。

口語	蹴る	蹴 ^お る	語幹 / 語尾		未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
			け	り						
文語	蹴る	蹴 ^お る	け	り	ける	ける	ける	ける	けれ	けよ

○文語下一段の命令形には「ける」の形を用ひない。

文語下一段活用に屬する動詞は「蹴る」だけである。

○蹴るは、用言に連る場合だけは、口語でも「けたふす」「けつまづく」など、「け」を用ひるのが普通である。

下一段活用

練習題 二〇

次の文語動詞の活用のしかたを示せ。

泣く 嗅ぐ 貸す 待つ 縫ふ 呼ぶ 蹴る
散る 散らす 抜く 在り 折る 居り 編む

上一段活用

〔七〇〕上一段活用 口語上一段活用の動詞の中「着る」は文語では左の如く活用し、口語と殆ど同一である。之を文語の上一段活用といふ。

	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
文語	着る	き	き	きる	きる	きれ	きよ
口語	着る	き	き	きる	きる	きれ	きよ

即ち、口語の命令形の「きろ」だけは文語に用ひない。

○文語上一段活用の動詞はカナ・ハマ・ヤワの各行にある。

○文語上一段活用に屬する動詞は「着る」「煮る」「干る」「見る」「射る」「鑄る」「居る」率ゐるなどである。
「着る」「煮る」「干る」「見る」「射る」「鑄る」「居る」

〔七一〕上二段活用

口語上一段活用の動詞の中、文語で上一段に活用するものの外は、大概之と違つた活用になる。たとへば「起きる」の文語の活用は、次の通りである。

	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
文語	起く	起	起	起	起	起	起
口語	起きる	起	起	起	起	起	起

上二段活用

右の様に、文語では、語尾は「きく」即ち五十音圖の「イウ」二段の音と、それになる「れよ」の附いたものとである。この様な活用を上

二段活用といふ。

○上二段活用の動詞は、カガタダハバマヤラの各行にある。

〔七〕下二段活用 口語下一段活用の動詞は、文語では大概違つた活用になる。たとへば「受ける」の文語の活用は次の通りである。

口語	文語	語	
受ける	受く	受 ^う	
		語幹	語尾
		未然	連用
け	け	終止	連體
け	け	(文)已然	(口)假定
ける。	く。	命令	
ける。	くる。		
け。	くれ。		
ける。	けよ		

下二段活用

右の様に、文語では、語尾は「けく」即ち五十音圖の「エウ」二段の音と、それになる「れよ」の附いたものとである。この様な活用を下二段活用といふ。

○下二段活用の動詞は、五十音圖の各行と、ガサダバの各行とにある。

○文語に、下一段活用の動詞（蹴る）があるが、それは口語では普通ラ行四段に活用する。

練習題 二一

A 次の文語動詞の活用のしかたを示せ。

過 ^す ぐ	恥 ^づ づ	強 ^し ふ	尋 ^ぬ ぬ	植 ^う う	逃 ^ぐ ぐ	任 ^ま す
報 ^ゆ ゆ	懲 ^ら る	恨 ^む む	混 ^ま す	周 ^あ 章 ^わ つ	教 ^ふ ふ	求 ^む む
越 ^こ ゆ	枯 ^か る	飢 ^う う	落 ^つ つ	撫 ^づ づ	吠 ^ゆ ゆ	考 ^ふ ふ

B 次の漢字を口語と文語との動詞に用ひて、その活用のしかたを比べて見よ。

老 ^お	据 ^す	殖 ^か	換 ^か	下 ^お	怖 ^お	生 ^お	生 ^は	絶 ^た	並 ^{なら}	合 ^あ	觸 ^ふ
----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	-----------------	----------------	----------------

第二十二章 文語動詞の活用の種類(三)

〔七〕力行變格 口語力變の動詞「来る」は、文語では次のやうに活用する。

練習題 三二

カ	カ
變	變
サ	サ
變	變

A 次の文語動詞の活用のしかたを示せ。

與^カす 輕^カんす 命^サず 理^カ解^カす 來^カ 安^カんす 案^カず 譯^カす

B 傍線をつけた動詞の活用の種類を考へよ。

- 一 社前より下を望めば、美しく彩色したる土佐繪に向ふ趣あり。
- 二 壁の如く立ちたる岩の面を、垂れたる鎖傳ひつゝ、攀ぢ登る。
- 三 茶屋に歸りて預け置きたる傘外套など受け取り、これより主峰を指して右の方に入る。
- 四 刈り果てたる田つらには下りゐる鳥さへ見えて豊かなる秋の煙滿ちわたる。
- 五 左に折れて池畔を過ぎ、又右に曲りて廣場に出づれば、中央に立てるは將軍の銅像なり。

六 常世は、ちぎれたる具足を着け、さびたる長刀を横たへ、わるび

れたる様もなく、進みて御前にかしこまる。

七 降り積れる雪も跡なく消えて、山河草木喜びにあふるる春は

來ぬ。

C 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 水を買^カうなどいふは、思ひもよらぬ事なり。
- 二 若き時學ばずば、老^リひて悔^ルむる時あるべし。
- 三 國家の榮^エへん事を願ひて、絶^スず産業を奨^メ励せり。
- 四 自ら深くその誤を恥^ズじて再び人に教^メゆるを欲せず。
- 五 輝元大軍を率^ルい來りて、宗治を救はんとせしが、秀吉に敵^スすべからざるを察^シして、和^ヲを請^ヒえり。
- 六 鹿追^ノ獵師は山を見^スず、飢^ヘたる者は食^ヲを擇^ビばず。
- 七 敵攻^メ寄^リすとも、城門を閉^ジて、決^シして出^ダすることなかれ。

第二学期

第二十三章 文語形容詞の活用と形容動詞

〔夫〕 文語の形容詞には五つの活用形がある。その名稱と主な用法とは次の通りである。

未然形 「ば」に連つて、假定の意味を表はす形である。

價高くば買ふまじ。新しくば買はん。

注意 口語の形容詞には未然形なく、假定の意味を表はすには假定形

終止形を用ひる。

連用形 動詞に連る時の形である。又口語「ても」の意味

の「とも」に連る。

價高くなる。新しくとも買ふまじ。

終止形 言ひ切るのに用ひる形である。

價高し。品新し。

文語形容詞の活用形

口語 我々が口語で用ひる
トキル言其
ヨ土台ニヒテ作
ツク文体ナリ
文語 現在談話ニ
用ヒナイガモ
語サレテ現在
ニハ文書ナ
カワニ用ヒ
ラレル一極ノ
文体ニナル

文語形容詞の活用

〔夫〕 形容詞の活用は、口語では一種であるが、文語では二種になる。

ク活用 口語の「高い」は、文語では次の様に活用する。

口語	文語	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
高し	高し	高	高	高	く	く	し	き	(口)假定	
高い	高い	高	高	高	く	く	い	い	けれ	けれ

文語形容詞の活用と形容動詞

練習題 二三

次の文から形容詞・形容動詞をぬき出し、その活用をいへ。

- 一 大國主命は、恭しく國土を天照大神に奉りぬ。大神その真心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。
- 二 縦は柔かにして工作に便なれば、箱類を作るに用ひられ、梅は堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の土臺となすに宜し。
- 三 波靜かなる島のあたり、高く低く群飛ぶかもめは、落花の風にひるがへるに似たり。
- 四 近頃は容態殊に悪しく候へば、命の限りも遠からじと、一同あきらめ居り候。
- 五 堂々たる風采と朗々たる音聲とは、まづ聽衆の心を動かしたり。
- 六 いかなる所にも樂しき地はあるべく、またいかなる所にも樂しからざる地はあるべし。

文語動詞の音便形

- 七 諺に「始よければ終よし」ともいひ、又「始あしければ後よし」ともいふ。

第二十四章 文語用言の音便形

〔克〕文語の用言にも音便形がある。その中、動詞の音便形は、主として四段ナ變、ラ變の動詞が助詞「て」に連る時に現はれる。その形及び種類は口語のと同じである。

- 一、語尾がイとなるもの〔イ音便〕 カ行四段のキ、ガ行四段のギから。(ガ行の時は「ては」「て」となる。) 聞いて(聞きて) 塞いで(塞ぎて)
- 二、語尾がウとなるもの〔ウ音便〕 ハ行四段のヒから。言うて(言ひて) 請うて(請ひて)
- 三、語尾がンとなるもの〔撥音便〕 バ行四段のビ、マ行四

文語形容詞の音便形

段のミ、ナ變のニから。(ては「で」となる。)

運んで(運びて) 踏んで(踏みて) 死んで(死にて)

四、語尾が促音となるもの(促音便) 夕行四段のチ、ハ行

四段のヒ、ラ行四段のリ、ラ變のりから。

勝つて(勝ちて) 養つて(養ひて) 刈つて(刈りて)

有つて(有りて)

〔△〕 文語形容詞の音便形は、主として、連用形が他の用言に連る時、又は連體形が助詞「かな」に連る時に現はれる。ウ音便形とイ音便形とがある。

日も高う(高く)なりぬ。 雨烈しう(烈しく)ふる。

よい(よき)かな。 悲しい(悲しき)かな。

練習題 二四

A 次の文から音便形をぬき出し、その原の形をいへ。

一 夜ふけに及んで松明の光おびたゞしう見ゆ。

二 清正は片鎌槍をしごいて突いてかゝる。

三 道に迷うて小川に出で、流れに沿うて下れば、一寒村に出づ。

四 こはいかに、降つて湧いたる敵の大軍。

五 人に長たるも、またかたいたるかな。

B 次の文に誤があつたら正せ。

一 仰ひで天の高きを見る。

二 勇むで家を出でたり。

三 重荷を負ふて坂を登る。

四 鹿毛なる馬に黒鞍置ゐて乗つたりけり。

五 言うてかひ無き事をなげくは愚なり。

六 飛むで火に入る夏の蟲。

七 人を疑う前に、まづ自己を省みよ。

文語助動詞の種類

第二十五章 文語助動詞の種類と活用(一)

〔八〕 文語の助動詞は、口語助動詞よりも一種多く、すべて十種に分れる。

受身 可能 使役 打消 過去及び完了 推量
希望 敬讓 指定 比況

○口語には比況の助動詞はない。

〔九〕 文語の助動詞にも活用がある。その活用のしかたは、動詞と同じものと、形容詞と同じものと(共に、或活用形の缺けたものがある)、特殊なものがある。他に、語形の變化せぬものもある。

〔八三〕 受身の助動詞 する らる

人に笑はる。主人に譽めらる。

文語助動詞の活用

受身の助動詞

助動詞ヲ抽出スル法

一 常ニ他ノ品詞ニ伴ヒテ現ルル(助動詞ヲ抽出スル法)
二 助動詞ニシテ他ノ品詞ニ伴ハズニ現ルル(助動詞ニシテ他ノ品詞ニ伴ハズニ現ルル)

可能の助動詞

〔八四〕 可能の助動詞 見る らる

一日に十里は歩まる。何時にても見らる。
「見る」の活用のしかたは、受身の「見る」と同じである。但しこれには、命令形がない。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	る	る	れよ
らる	られ	られ	らる	らる	らる	られよ

下二段活用

「見る」は、四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形につき、「らる」は、その外の活用の未然形につく。

○サ變の動詞に附いて「罪せらる」「侮辱せらる」となるのを、現代の文語では罪せらる「侮辱せらる」ともいふ。

「見る」の動詞への付き方は、受身の「見る」と同じである。可能ニシテ他ノ品詞ニ伴ハズニ現ルル(助動詞ニシテ他ノ品詞ニ伴ハズニ現ルル)

使役の助動詞
 文語形定詞
 否定逆能法
 未然順能法
 連用(中止法)
 終(第一終止法)
 連体(第二終止法) て、たる
 連体(連体法)
 終(第三終止法)
 連体(終止法)
 命(十レ)

〔八五〕使役の助動詞 す さす しむ

弟に苗木を買はす。苗木を庭に植ゑさす。
 苗木を鉢に移さしむ。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
						下二段活用

〔す〕は、四段・ナ變・ラ變の動詞の未然形に付き、〔さす〕は、その外の活用の未然形につく。「しむ」は、すべての動詞の未然形に附く。

○〔さす〕がサ變の動詞に附いて、「携帶せさす」「選舉せさす」といふべきを、現代の文語では、「携帶さす」「選舉さす」ともいふ。

打消の助動詞

文語動詞の場合
 未然形
 否定原能法
 連用形(連用法)
 連用形(連用法)
 終止形(第一終止法)
 連体形(連体法)
 終止形(第二終止法)
 連体形(連体法)
 已然形(第三終止法)
 連体形(連体法)
 命令形(命令法)
 命令形(命令法)

〔八六〕打消の助動詞 ず ざり

花は未だ咲かず。
 群衆は既に散じて一人も見えざりき。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ
						ラ變

〔ず〕〔ざり〕は、動詞の未然形に附く。

練習題 二五

傍線を附けた助動詞の種類と、その活用のしかたとを述べよ。
 一 彼の眺め入りしは繪にあらす實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。
 二 今日文明の利器と稱せらるるものにして、エヂソンの天才に
 打削(たけく)らるるもの殆どなしといふ。

過去及び完了の助動詞
①動作の完了
②継続態
③存在態

- 三 かねての本望を遂げさせんとて、終に出家せしめたり。
- 四 後方は群山にさへぎられて見えざれども、前方は際涯なき平野なり。
- 五 避けらるべき禍を避けんとする意なきものは、得らるべき機会をも失ふ者なり。
- 六 その時の事のみ思ひ出されて、なつかしさに堪へず。
- 七 涼風に袂を拂はせつゝ、橋上に立てば、河鹿の音もかすかに聞取られたり。

第二十六章 文語助動詞の種類と活用(二)

〔六七〕 過去及び完了の助動詞 き けり(以上過去) ぬ たり 以上(完了)

昔支那に吳越といふ二國ありき。

昔一人の男ありけり。
庭の梅もはや散りぬ。
とかくして今日も暮しつ。
門前に國旗を掲げたり。
四月より中學生となれり。

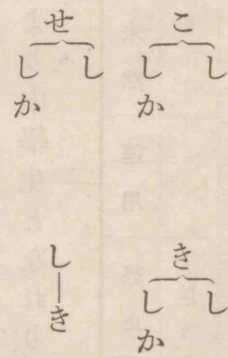
了 完 態

語	き	けり	ぬ	つ	たり	り
未然	(けら)		な	て	たら	(ら)
連用			に	て	たり	(り)
終止	き	けり	ぬ	つ	たり	り
連體	し	ける	ぬる	つる	たる	る
已然	しか	けれ	ぬれ	つれ	たれ	(れ)
命令			(ぬ)	(てよ)	(たれ)	(れ)

特殊活用
ラ變
ナ變
下二段活用
ラ變
ラ變

「き」「けり」「ぬ」「つ」「たり」は、動詞の連用形に附く。但し「き」「ぬ」には、次の例外がある。

一、「き」の終止形は、カ變の動詞には全く附かず、連體形已然形は、その未然形にも附く。又「き」の連體形已然形はサ變の動詞の連用形には附かず、その未然形に附く。



二、「ぬ」は、通例ナ變の動詞には附かない。

「り」は四段活用の動詞の已然形と、サ變の動詞の未然形にだけ附く。

われ等は全力を盡せり。

われ等は最後まで、努力せり。

「けり」は、また咏歎の意味に用ひることがある。

小さき蟲にも心はありけり。

〔八〕 推量の助動詞 らし むん らむらん けむけん

べし まじ じ

彼處にも雪は降るらし。

麓には旅店もあらむ。

明日も雨降らむ。

雲のいづくに月宿るらむ。

昔の友はいづち行きけむ。

演習に参加する軍艦は百艘を超ゆべし。

如何なる敵にも敗るまじ。

喜の來らむ日も遠からじ。

指定の助動詞

「る」「らる」の活用は、受身の「る」「らる」と同じである。また動詞への付き方も、受身の「る」「らる」と同じである。「す」「さす」「しむ」の活用は、使役の「す」「さす」「しむ」と同じである。但し現代の文語では、他の敬意を示す語と共に用ひるのが普通で、その終止形以下はあまり多く用ひない。「給ふ」「奉る」「参らす」「候ふ」等も、敬讓の助動詞の様に用ひられる。

〔九〕 指定の助動詞 なり たり

東京は我が國の首府なり。
 心なき人は、之を見て笑ふなり。
 彼の父は大實業家たりき。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ

ラ變

比況の助動詞

「なり」「たり」は體言に附く。「なり」は、その外に、用言の連體形にも附く。

〔十〕 比況の助動詞 ごとし

降る雪は花の散る(が)ごとし。
 往事を思へば夢のごとし。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき		

ク活用

「ごとし」は、動詞の連體形、又は之に助詞「が」の附いたもの、又は體言に助詞「の」の附いたものに附く。

練習題 二七

A 傍線を附けた助動詞の種類とその活用のしかたとを述べよ。

- 一 天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。敬入連 笑ませ給ひぬ
 - 二 學生たるものは、すべて某の如くありたきものなり。比コトワレ連 某
 - 三 陶山義高等皇居に火を放ち奉れば、後醍醐天皇は終に笠置を出でさせ給ふ。敬入連 出でさせ給ふ
 - 四 人々もはじめ一二町が程は、主上を扶けまゐらせて、前後に御供申されけり。敬入連 人々もはじめ一二町が程は
 - 五 雨の降るかと思召して、木蔭に立寄せ給へば、木の下露のはらはらと御袖にかゝるなりけり。敬入連 雨の降るかと思召して
- B 次の文から助動詞をぬき出し、その活用のしかたを示せ。
- 一 観音寺には、藤原藤房卿の念じ給ひける観音を安置せり。敬入連 観音寺には
 - 二 佛前には五十餘歳の旅商人ありて、さめくと泣きゐたり。敬入連 佛前には
 - 三 うちつけにその故を問ふべきにあらねば、われも立去りて元の驛路に出でぬ。敬入連 うちつけに
 - 四 麓に松林に包まれて立てる神社あり。里人に問へば八幡宮。敬入連 麓に松林に包まれて

第三季

第二十八章 文語の助詞

〔查〕 文語の助詞は、口語のとは違つた語を用ひる事があり、又同じ語を用ひても、意味や用ひ方の異なるものがある。

〔查〕 第一種の助詞 主として體言に附くもので「の」「を」「に」

六

五 かの建御雷神が大國主命と會見せられしは、此處なるべしといふ。敬入連 かの建御雷神が大國主命と會見せられしは

七 そのかみ此處にかめしく向ひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如し。敬入連 そのかみ此處にかめしく向ひあひけん英雄の姿

明治神宮の御造營には、各地より御手傳を願ひ出づる者多かりしが、何れも十日間を限りて土木に従事せしめたるに、通常の人夫にもまさりて、仕事ははかどりたりと聞く。これも真心の致す所なるべし。敬入連 明治神宮の御造營には

「へ」「と」「より」「にて」などを用ひる。

が 口語と同じく、主語に附く外に、又體言を修飾する修飾語をつくる爲に用ひることがある。

誰が宿 梅が香 君が代

より 口語と同じく、「山より高し」のやうに用ひる外に、口語の「から」の代りにも用ひる。此較場所

大阪より歸る。 會は六時よりはじまる。

へ 文語では、主として方角を示す爲に用ひる。

西へ飛ぶ。 京都へ去る。

にて 口語の「て」の代りに用ひる。

東京にて逢ふ。 萬年筆にて書く。 病氣にて休む。

○口語の「から」では、文語には普通用ひない。

〔壺〕 第二種の助詞 主として用言に附いて、接續詞のやうな

第二種

はたらきをするもので、「ば」「とも」「ど」「ども」「が」「に」「を」「て」「いつ」「ながら」などを用ひる。

ば 口語では用言の假定形に附いて、假定の意味を表はすが、文語では未然形に附いて、假定の意味を表はす。又已然形に附いては、口語第二種の助詞「と」又は「から」の意味を表はす。

彼行かば我も行かむ。 價安くば買ふべし。

風吹けば波立つ。 心正しければ物に恐れず。

今日は雨降れば外出せず。

この花美しければ、人に折らるるおそれあり。

とも 動詞の終止形、形容詞の連用形に附いて、口語の「ても」の意味に用ひられる。

繪に書くとも筆も及ばじ。 苦しくとも忍ぶべし。

第三種

どども 用言の已然形に附いて、口語の「けれども」の意味に用ひられる。

見れども見えず。

某は身賤しけれど、ども心の正しきものなり。

がにを 共に用言の連體形に附いて、口語第二種の助詞「のに」の意味に用ひられる。

て 文語では連用形に付き、時として音便形に附く。

つつ 動詞の連用形につき、口語「ながら」の意味に用ひられる。

○口語の「ても」「けれども」「のに」「から」「ので」「し」は文語には用ひない。

〔六〕 第三種の助詞 第一種第二種以外のものでは「も」「ぞ」「こそ」「や」「か」「だに」「すら」「さへ」「のみ」「ばかり」「まで」「な」「な……」「そ」「ばや」「がな」「かな」「かし」「よ」などが用ひられる。口語と意味や用ひ方

の違つたものを挙げれば、

ぞやか これ等が用言や助動詞に附いて文の終りに来る

時「ぞ」か「は」連體形に、「や」は終止形に附く。

何人の言ひけるぞ。 あるかなきか。

ありやなしや

右の助詞が、文の中にあつて、用言や助動詞が之を受けて文を結ぶ時、必ずその連體形を用ひる。

名残なく散るぞめでたき。 誰かある。

惜しくやあるべき。

こそ この助詞が文の中にあつて、用言や助動詞が之を受けて文を結ぶ時、必ずその已然形を用ひる。

時こそ来たれ。

かなたに見ゆる蘆屋こそ我がなつかしの住みななれ。

係結

かやうに「ぞ」「や」「か」及び「こそ」に對して、連體形及び已然形で文を結ぶのを「係結」の法則といふ。

だにすら 口語の「さへ」でもなどの意味に用ひる。

いろはだに知らず。 治まれる今の世にすら此の如し。 口語の「までも」の意味に用ひる。

風さへ吹き出でたり。 残る一人の子にさへ別れたり。

のみ 口語の「だけ」「ばかり」などの意味に用ひる。

彼のみ喜ばざるはずなし。

残れるはこれのみなり。

なな…そ 共に禁止の意を表はす。「な」は動詞の終止形に、

「な…その」「そ」は連用形に附く。

忘るな へ行きそ。

但し、「な」はラ變の動詞にはその連體形に附く。 又「そ」は

吹く風をなこの
虞と見へども
みてもせに散る
いざくころかな
風ニ来テクレスト
フカ風カサワトコケ
シマ

カ變・サ變の動詞には、その未然形に附く。

あるな。 な(來)そ。 なせ(爲)そ。

ばや 希望の意を表はす。 動詞の未然形に附く。

問はばや遠き世々の跡。

がな 多くの場合に助詞「も」に連つて希望の意を表はす。

昔を今になすよしもがな。 これ無くもがな。

かな 體言又は用言・助動詞の連體形に附いて、感動の意を

表はす。

けなげなる男の子かな。 あゝ悲しきかな。

かし 言ひ切つた形に附いて、意味を強めるのに用ひる。

幸あれかしと祈る。 然覺ゆるぞかし。

練習題

二八

次の文から助詞をぬき出し、その用ひ方を説明せよ。

- 一 父母の病あつければ、醫藥の効なきを知るとも、尙治療につとむるは人情の常にあらずや。心力を盡くしてしかも救ふ事能はざるは天命なり。事既にこゝに至る。われたゞ死せんのみ。
- 二 よきを取り悪しきを捨てて外つ國に劣らぬ國となすよしもがな。
- 三 宣長は八歳の頃より讀み書きを習ひたりしが、後契沖の著せる書物を見て國學に志し、遂に一代の大學者となれり。
- 四 近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。
- 五 山櫻の朝日に匂ふ趣は、外國人の味はひ得ざるところなり。
- 六 之を聞いて誰か憤らざるべき。
- 七 今こそ起つべき時なれとて、急に兵を率ゐて隣國に攻入れり。

練習題 二九

次の文から、活用のある語をぬき出し、その活用のしかたを示せ。

- 一 行幸あまりに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。
- 二 さらば美作の杉坂に待ち奉らんとて、げはしき山路をふみわけてたどり着きたりしに、主上はや院庄に入らせ給ふといふ。
- 三 高德せめてはこの所存を君に知らせ奉らばやとて、夜にまぎれて行在所の御庭にしのみ入り、櫻の幹をけづりて詩の句を書きつけたり。
- 四 不思議や、今まで荒れわたる大海、おのづから静まりて、穩かなる風となり、尊はつゝがなく上總の國に着き給ひきといふ。
- 五 花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水の観音の堂前に満てり。
- 六 暮色は東山を籠め、叡山を廻り、賀茂川におそひ來りて、清水の塔もやうやく隠れぬ。
- 七 兩側には松杉天を蔽ひて晝なほ暗く、立ちまじる紅葉の色は

十 松明たいまつの光と見えて面白おもしろき山路さんろなるが、殊ことに美うつくしきは白膠木ぬろでにて、楓かへではあまり多おほからず。

練習題 三〇

- A 「練習題二八」の文から助動詞をぬき出し、その活用のしかたを示せ。
- B 「練習題二九」の文から助詞をぬき出し、その用ひ方を説明せよ。
- C 「練習題二八・二九」の文から副詞をぬき出し、かつその被修飾語を示せ。

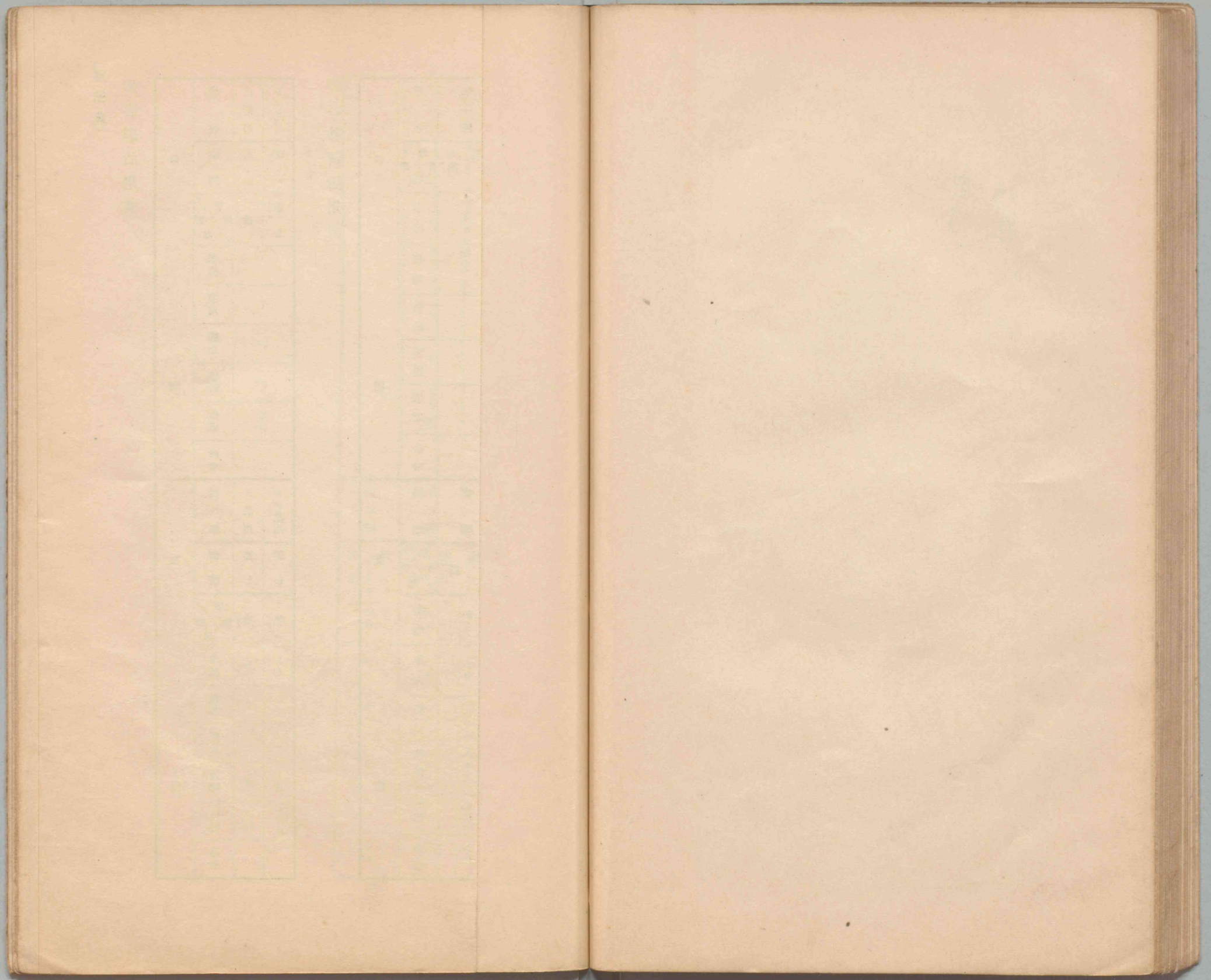
植

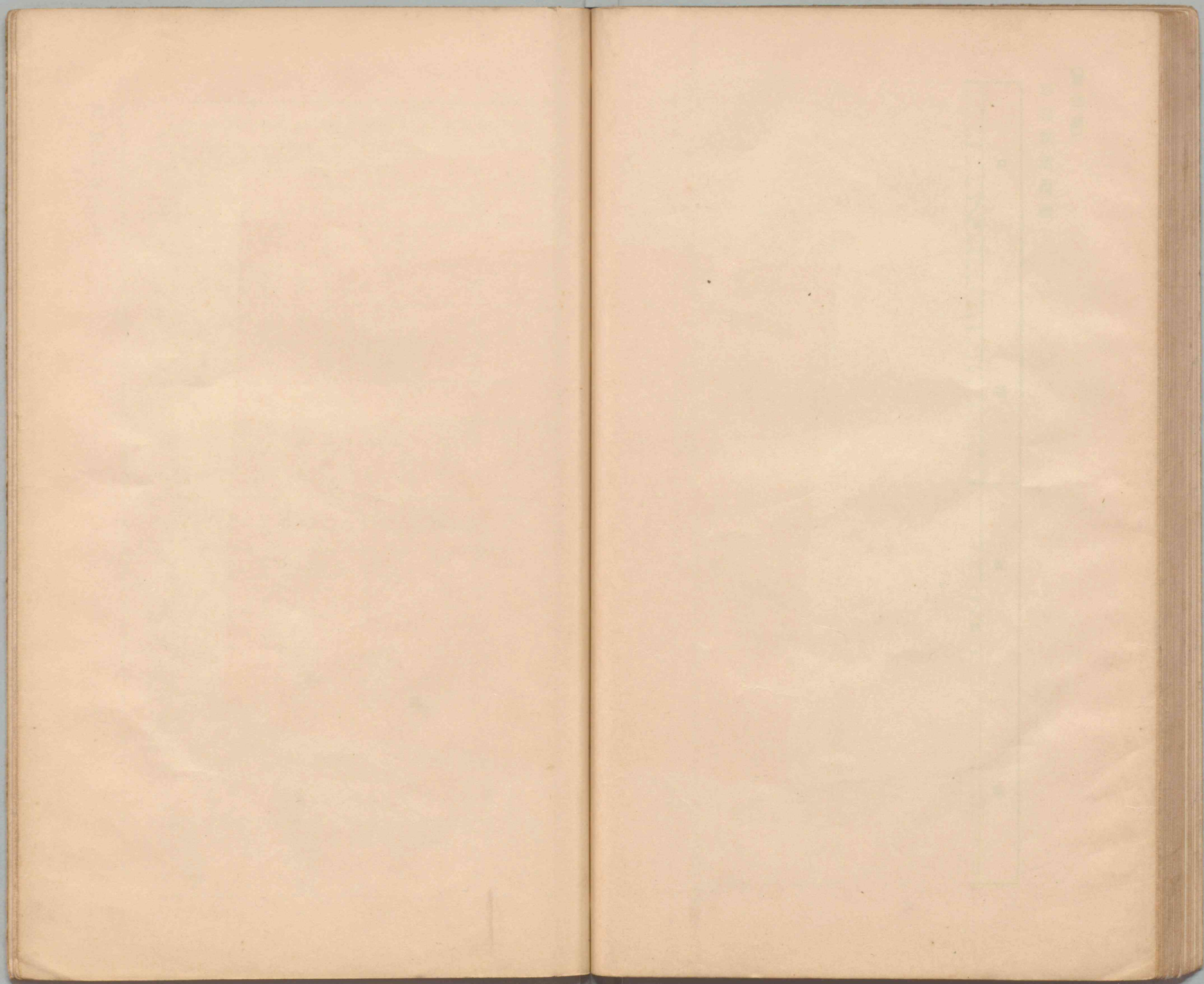
得

ワ 行	ラ 行	ヤ 行	マ 行	ハ 行	ナ 行	タ 行	サ 行	カ 行	ア 行	ワ 行	ラ 行	ヤ 行	マ 行	ハ 行	ナ 行	タ 行	サ 行	カ 行	ア 行	行
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	ア 段
㊦	リ	㊦	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	㊦	ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	イ 段
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ウ 段
㊦	レ	㊦	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	㊦	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	エ 段
㊦	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	㊦	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	オ 段
ハ 行	ハ 行	タ 行	サ 行	ガ 行						ハ 行	ハ 行	タ 行	サ 行	ガ 行						
バ	バ	ダ	ザ	ガ						ば	ば	だ	ざ	が						ア 段
ビ	ビ	ヂ	ジ	ギ						び	び	ぢ	じ	ぎ						イ 段
ブ	ブ	ヅ	ズ	グ						ぶ	ぶ	づ	ず	ぐ						ウ 段
ベ	ベ	デ	ゼ	ゲ						べ	べ	で	ぜ	げ						エ 段
ボ	ボ	ド	ゾ	ゴ						ぼ	ぼ	ど	ぞ	ご						オ 段

〔第一表〕
五十音圖

齊唱
暗記

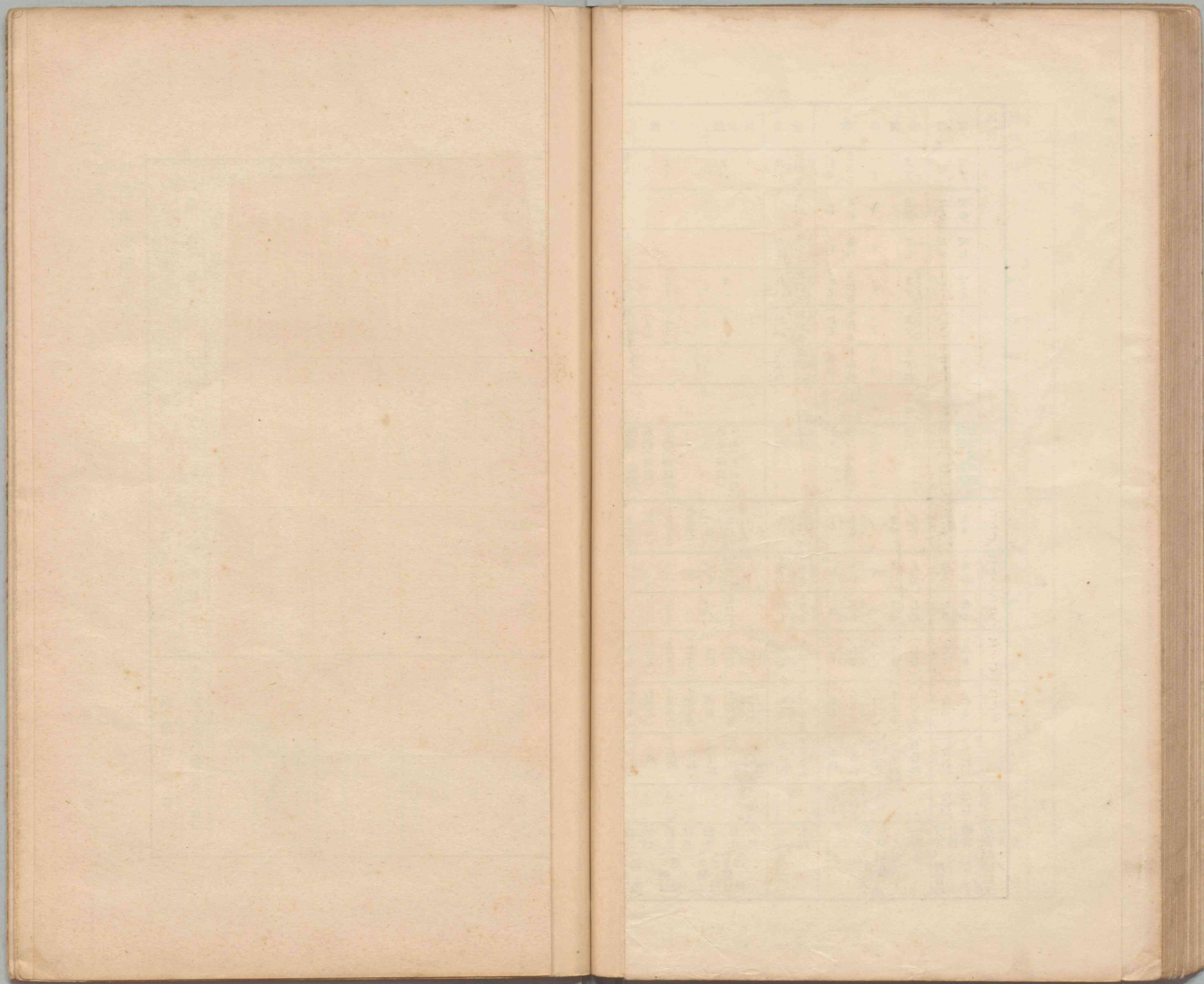




〔第四表〕

助動詞活用表

比況	定指	讓	敬	望希	推量		了完び及去過		消打	役使	能可	身受	種類	口	
					まい	よう	た	ぬ						語	未然
です	だ	ます	られる	たい	まい	よう	た	ぬ	ない	させる	られる	られる	語		
でせ	だら	ませ	られ	たがら			たら			させ	られ	られ	未然		
でし	だつ	まし	られ	たく				ず	なく	させ	られ	られ	連用		
です	だ	ます	られる	たい	まい	よう	た	ぬ	ない	させる	られる	られる	終止		
(な)		ます	られる	たい	(まい)	(よう)	た	ぬ	ない	させる	られる	られる	連體		
なら		ますれ	られ	たけれ			たら	ね	なければ	させ	られ	られ	假定		
		ませ								させよ		られよ	命令		
形容詞の終止	體言、助詞ノ	連用	受身のレル、ラレルに同じ	連用	終止(右以外)	終止(右以外)	連用	未然	未然	未然(右以外)	受身のレル、ラレルに同じ	未然(右以外)	接續		
ごとし	たり	なり	しむ	さす	する	まほし	たり	ぬ	ざり	しむ	さす	する	語		
ごとき	たら	なら	しめ	させ	られ	まほしく	たら	な	(けら)	しめ	させ	られ	未然		
ごとき	たり	なり	しめ	させ	られ	まほしく	たり	に		しめ	させ	られ	連用		
ごとし	たり	なり	(しむ)	(さす)	する	まほし	たり	ぬ	けり	しむ	さす	する	終止		
ごとき	たる	なる	(しむる)	(さする)	する	まほしき	たる	ぬる	ける	しむる	さする	する	連體		
	たれ	なれ	(しむれ)	(さすれ)	られ	まほしけれ	たれ	ぬれ	しか	しむれ	さすれ	られ	已然		
	たれ	なれ			られよ		たれ	(たれ)		しめよ	させよ	られよ	命令		
はガ・ノ	體言	連體	助動詞に同じ	受身、使役の助動詞に同じ	連用	未然	連用	連用	連用	未然	未然	未然	接續		



〔第五表〕

口語助動詞接續表

動詞以外に		動詞	動詞以外に	
形容詞終止形に 體言又は助詞ノに	終止形に	連用形に	未然形に	未 然 形 に
(定指) てだ す	(量推) らしい	(及去過 了完び) た (サ行以外 の四段は 音便形に)	(消打) ぬ ない (サ變は「し」に) ぬ(ん) (サ變は「せ」に)	(身受) れる られる (四段以外に)
(定指) てす	(量推) らしい		(役使) せる させる (四段以外に)	(能可) れる られる (四段以外に)
	(量推) らしい まい (四段に)			(量推) う よう (四段以外に) まい (四段以外に) (サ變は「し」に)
				(讓敬) れる られる (四段以外に)
				(讓敬) ます たい たがる

○指定の「だら(う)」「てせ(う)」「は」は動詞の終止形に連る。

文語助動詞接續表

口語助動詞接續表

		動詞			動詞以外に	
		未然形に	連用形に	終止形に	形容詞終止形に	體言又は助詞ノに
(身受)	れる られる (四段以外に)					
(能可)	れる られる (四段以外に)					
(役使)	せる させる (四段以外に)					
(消打)	ない ぬ(ん) (サ變は「し」に)					
(量推)	う よう (四段以外に)		(及去過) 了完び			
	まい (四段以外に)	(望希)	た の四段は 音便形に)	らしい まい (四段に)	(量推)	(量推)
(譲敬)	れる られる (四段以外に)	(譲敬)	た が			
		ます			(定指)	(定指)
					です	です
						だ
						です

○指定の「だら(う)」「てせ(う)」は動詞の終止形に連る。

文語助動詞接續表

		動詞			動詞以外に	
		未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	已然形に
(身受)	る らる (四段ナ變ラ變 右以外に)					
(能可)	る らる (四段ナ變ラ變 右以外に)					
(役使)	す さす (四段ナ變ラ變 右以外に)					
(了完び及去過) 了完	り (サ變に)		たり ぬ けり も			り (四段に)
(消打)	ず ざり					
(量推)	む(ん) じ	(量推)	けむ(けん)	(量推) らし む ら (ラ變以外に 同前)	(量推) らし む ら (ラ變に 同前)	
(望希)	まほし	(望希)	たし	まべし じ (同前)	まべし じ (同前)	
				(定指) なり	(定指) なり	
				(況比) ごとし	(定指) たり	
					(況比) ごとし	
						形容詞連體言に 助詞ノ ガに

○(敬讓)のる、らるは(可能)のと同じく、又(敬讓)のす、さす、しむは(使役)のと同じ。
○きはカ變には「し」「ししか」「ぎし」「しき」と連る。サ變には「せし」「せしか」「しき」と連る。

TABLE I

Year	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
Population	1,000,000	1,500,000	2,000,000	2,500,000	3,000,000	3,500,000	4,000,000	4,500,000	5,000,000	5,500,000	6,000,000	6,500,000	7,000,000	7,500,000
Area (sq. miles)	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
Density (per sq. mile)	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75

TABLE II

Year	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
Population	1,000,000	1,500,000	2,000,000	2,500,000	3,000,000	3,500,000	4,000,000	4,500,000	5,000,000	5,500,000	6,000,000	6,500,000	7,000,000	7,500,000
Area (sq. miles)	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
Density (per sq. mile)	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75

〔第六表〕

口語助詞接續表

		(第一種) ものがへにかよ りらて	體 言 に				
			未 然 形 に	用			
			連 用 形 に		(第二種) て (サ行以外の 四段は音便 形に) ても (同前) たり (同前) ながら (動詞に)		
			終 止 形 に	言	(第二種) と けれど(も) が の に から し ながら (形容詞に)	(第三種) な	
			連 體 形 に		(第二種) の て の に	(第三種) の	
			已 然 形 に	に	(第二種) ば		

文語助詞接續表

		(第一種) ものがへにと よりにて	體 言 に				
			未 然 形 に	用	(第二種) ば	(第三種) な—そ (カ變サ變 に) ばや	
			連 用 形 に		(第二種) て (音便形にも) つつ ながら とも (形容詞)	(第三種) な—そ (カ變サ變 以外に)	
			終 止 形 に	言	(第二種) とも (動詞に)	(第三種) な (ラ變以外に) や	
		(第一種) ものがへにと よりにて	連 體 形 に		(第二種) が に を	(第三種) な (ラ變に) かな よぞ	
			已 然 形 に	に	(第二種) ば ど ども		

蔡仁風 (2012)

廣東省... 廣東省... 廣東省...



廣東省... 廣東省... 廣東省...

廣東省... 廣東省... 廣東省...

廣東省... 廣東省... 廣東省... 廣東省... 廣東省...

